

三木市

# 宿原寺ノ下遺跡

——(一)三木環状線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告——

2004年3月

兵庫県教育委員会

三木市

# 宿原寺ノ下遺跡

—(一)三木環状線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2004年3月

兵庫県教育委員会



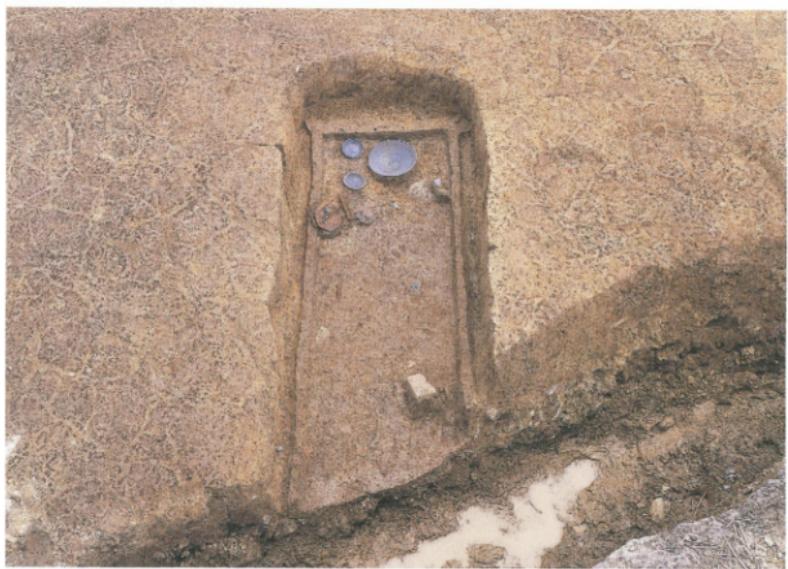
木棺墓出土の和鏡



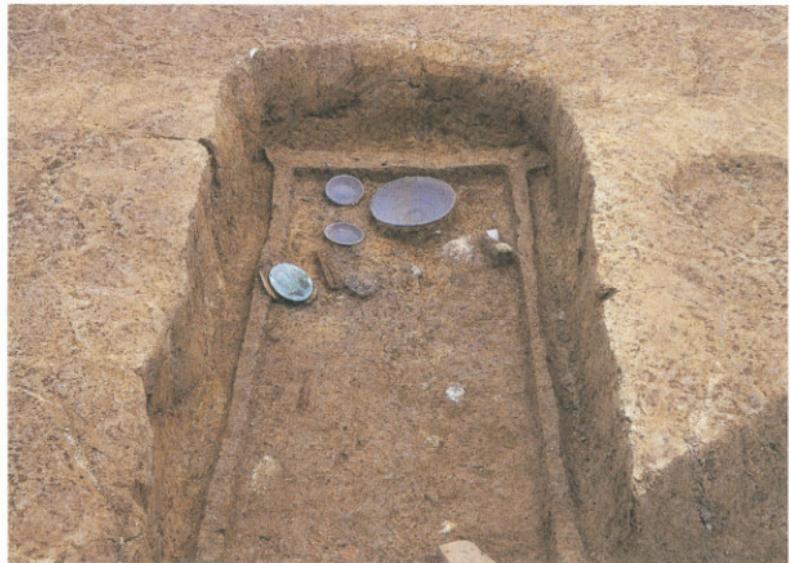
木棺墓棺内出土の遺物



木棺墓棺痕跡の状況



木棺墓完掘状況



木棺墓棺内の状況（西から）



同上副葬品検出状況（南から）



調査地点遠景（東から）



調査地点遠景（北から）



調査地区全景（東から）



調査地区全景（南から）



調査地区全景（西から）



調査地区全景（北から）

## 例　　言

1. 本書は、三本市に所在する、宿原寺ノ下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(一) 三木環状線緊急道路改良事業に伴うものである。兵庫県社土木事務所（当時）の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成9年度に全面調査を実施した。
3. 遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。
4. 写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については（株）イーストマンに委託した。
5. 本書の挿図第2図「周辺の遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000「三木」「淡河」を使用した。また、挿図第1図「遺跡の位置」は、三本市発行の1/10,000「三本市都市計画図」を使用した。また、写真団版1の空中写真是国土地理院 CKK-74-14-C27A-4 を使用した。
6. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準（TP）を基とし、方位は国土地標V系の座標北を指す。
7. 本書の図集は西口、執筆は西口・岡本（第IV章）が行った。
8. 調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に、作成した写真・図版等の資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）において保管している。
9. なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、三本市教育委員会 小網 豊氏、京都国立博物館 久保智康氏、独立行政法人 奈良文化財研究所 高妻洋成氏・肥塚隆保氏・佐藤昌憲氏、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 加古千恵子氏・岡田章一氏・藤田 淳氏・池田征弘氏から御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の体制.....	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査の概要.....	7
第1節 遺跡の概要.....	7
第2節 第1面の遺構について.....	8
第3節 第2面の遺構について.....	9
第4節 第3面の遺構について.....	12
第5節 遺物について.....	13
第Ⅳ章 出土和鏡の分析.....	24
第Ⅴ章 まとめ.....	27
第1節 第1面畠状遺構について.....	27
第2節 第2面の遺構群について.....	27
第3節 おわりに.....	30

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	2
第2図 周辺の遺跡.....	4
第3図 調査区の配置図.....	6
第4図 蛍光X線定性分析スペクトル.....	25
第5図 和鏡の分析箇所.....	26

## 表目次

表1 周辺の遺跡.....	5
表2 出土遺物観察表I.....	20
表3 出土遺物観察表II.....	21
表4 出土遺物観察表III.....	22
表5 出土遺物観察表IV.....	23

## 図版目次

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 図版1 遺構全体図       | 図版8 壊穴住居址状遺構(上層)      |
| 図版2 第1面 墓状遺構    | 図版9 壊穴住居址状遺構(下層)      |
| 図版3 第2面 遺構詳細図I  | 図版10 柱穴出土の遺物          |
| 図版4 第2面 遺構詳細図II | 図版11 土坑出土の遺物I         |
| 図版5 木棺墓SX205I   | 図版12 土坑出土の遺物II        |
| 図版6 木棺墓SX205II  | 図版13 壊穴住居址状遺構・包含層出土遺物 |
| 図版7 土坑          | 図版14 金属製品・石製品・木製品     |

## 写真図版目次

- |                                    |
|------------------------------------|
| 卷頭図版1 木棺墓出土の和鏡・木棺墓棺内出土の遺物          |
| 卷頭図版2 木棺墓棺痕跡の状況・木棺墓完掘状況            |
| 卷頭図版3 木棺墓棺内の状況(西から)・同上副葬品検出状況(南から) |
| 卷頭図版4 調査地点遠景(東から)・調査地点遠景(北から)      |
| 卷頭図版5 調査地区全景(東から)・調査地区点全景(南から)     |
| 卷頭図版6 調査地区全景(西から)・調査地区全景(北から)      |

- |                             |                      |
|-----------------------------|----------------------|
| 写真図版1 空中写真I(宿原地区周辺)         | 写真図版16 木棺墓           |
| 写真図版2 空中写真II 調査地点遠景         | 写真図版17 壊穴住居址状遺構      |
| 写真図版3 空中写真III 遺構全景          | 写真図版18 柱穴出土遺物        |
| 写真図版4 空中写真IV 調査区中央から北半の状況   | 写真図版19 土坑SK236出土遺物   |
| 写真図版5 空中写真V 調査区南半第2面の状況     | 写真図版20 土坑・木棺墓出土遺物    |
| 写真図版6 空中写真VI 調査区南半から中央の状況   | 写真図版21 土師器・黒色土器      |
| 写真図版7 空中写真VII 調査区中央の状況      | 写真図版22 土師器擂鉢・鍋・須恵器小皿 |
| 写真図版8 空中写真VIII 調査区中央から北半の状況 | 写真図版23 須恵器碗I・II      |
| 写真図版9 空中写真IX 調査区北半の状況       | 写真図版24 国產施釉陶器・輸入磁器   |
| 写真図版10 第1面の遺構               | 写真図版25 国產無釉陶器・平瓦I    |
| 写真図版11 第1面・第2面の遺構           | 写真図版26 平瓦II          |
| 写真図版12 第2面 掘立柱建物I           | 写真図版27 弥生土器・その他の土器   |
| 写真図版13 第2面 掘立柱建物II          | 写真図版28 包含層出土土器・石製品   |
| 写真図版14 柱穴からの遺物出土状況          | 写真図版29 金属製品・木製品      |
| 写真図版15 土坑                   |                      |

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

三木市宿原地区では、平成8年2月に三木市教育委員会が圃場整備事業にともなう確認調査を実施しており、宿原寺ノ下遺跡はこの調査によって確認された。

今回、調査対象となった緊急道路建設用地は圃場整備対象地内を南北に縱断するもので、三木市教育委員会が掘削した試掘坑の幾つかが用地内に含まれている。このため、三木市教育委員会の確認調査成果によって2,971 m<sup>2</sup>について全面調査を計画した。

以上の結果を踏まえ、兵庫県社土木事務所（当時）より平成9年3月26日付社土第3170号で依頼を受け、全面調査を実施した。

調査の方法は、調査対象範囲の2,971 m<sup>2</sup>について水田耕土・近世以降の堆積土・盛土については機械力によって排除し、以下の堆積については人力によって掘削・精査を実施した。

また、ヘリコプター使用による空中写真撮影を8月4日に実施している。

### 第2節 調査の体制

発掘調査・整理作業とともに、兵庫県社土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。発掘調査は平成9年度に、整理作業は平成15年度に実施し、同年度に刊行した。

#### 1. 発掘調査

全面調査（遺跡調査番号 970170）

調査担当者 調査第3班 西口圭介 岡本一秀

調査補助員 中村真也・宮永宜和

現場事務員 五百藏道代

調査期間 平成9年5月7日～8月11日

調査面積 2,971 m<sup>2</sup>

#### 2. 整理作業

出土遺物の整理については、平成9年（全面調査時）に遺物洗浄を一部実施した以外すべて平成15年度に実施した。

調査第3班 西口圭介

整理保存班 菱田淳子 岡本一秀

実測・製図・レイアウト 尾鷲都美子

接合・補強 吉田優子 真子ふさ恵 石野照代 中田明美 西野淳子 蔵 幾子 大仁克子

加藤裕美 又江立子

金属製品保存処理 栗山美奈 三好綾子 藤井光代 三島重美



第1図 遺跡の位置 (1/10,000)

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

遺跡の所在する三木市は、神戸市の北西、兵庫県の南東部に位置し、市の中央部を子午線が通過している。

三木市は三木町（旧久留美村を含む）・別所村・細川村・口吉川村・志染村が昭和29年に合併し現市域を形成している。平成15年8月現在の人口は7万6千人を数え、近年、市域の中央から西部では阪神間のベッドタウンとしての開発が著しい。加えて市域の中央の丘陵地では「グリーンピア三木」や「三木山森林公園」などに代表される保養・研修施設や「播磨情報公園都市」・「震災記念公園」などの情報・防災拠点の建設、山陽自動車道の開通に伴う交通インフラの整備などが行われてきた。

一方、東部から中央部西半にかけての水田地域では、都市近郊農業をめざして圃場整備事業をすすめてきた。宿原寺ノ下遺跡周辺においても圃場整備事業を開始し、整備事業に係わる埋蔵文化財確認調査を平成7年度に実施している。

遺跡が位置する宿原は市域の中央部に近く、志染川によって形成された氾濫原・河岸段丘上に位置している。

市域南部を流れる志染川は市域東部の志染町御坂で淡河川をあわせて西流し、平井・与呂木集落にそつて南下、宿原から岩宮にかけて大きく北へ蛇行し、美義川へと合流している。今回の調査地点は、志染川の攻撃面にあたり、氾濫原よりも一段高い段丘の縁辺部に位置している。

### 第2節 歴史的環境

三木市的主要部は奈良時代には美義郡（みなぎのこほり）と呼ばれ、『播磨風土記』には高野里・枚野里・志染里・吉川里の四里が記されている。

宿原周辺を含めた市内の遺跡については、平成13年度三木市教育委員会発行の『三木市遺跡分布地図』に詳しく述べられており、本報告では多くを触れない。周辺の遺跡については、分布地図と一覧を上げておく。

宿原地区周辺では、志染川対岸の与呂木宮ノ元遺跡において旧石器が採取されており、市域で最も古い遺跡が段丘上に存在したと認識できる。

縄文時代、及び弥生時代前期の状況は詳らかではない。

宿原地区周辺では、宿原寺ノ下遺跡を含め、志染川沿いの段丘上から弥生時代中期の竪穴住居址・方形周溝墓などが見つかっており、弥生時代中期に入つて、急速に開発が進んだことが伺える。

また、弥生時代後期に入ると、志染川沿いでは吉田中ノ坪遺跡などにおいても遺跡の存在が知られるようになる。

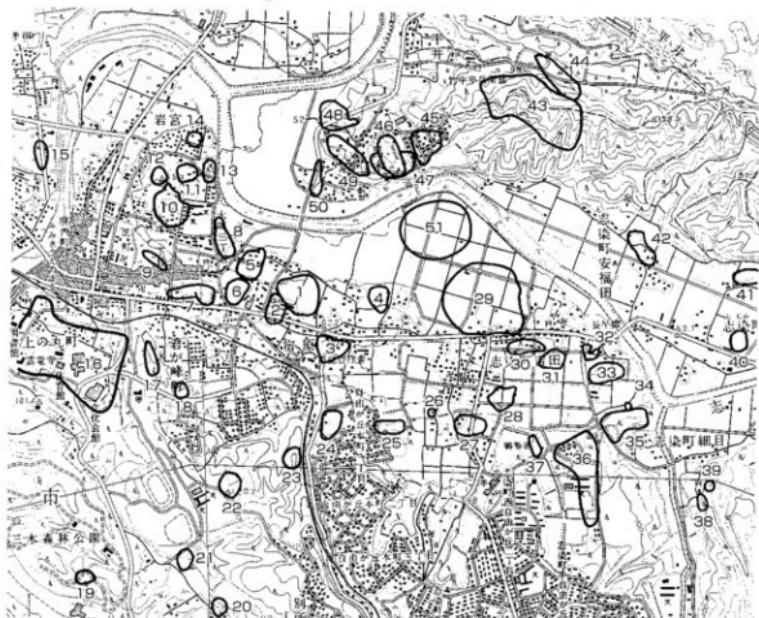
古墳時代の集落は宿原地区周辺では、宿原岡ノ下遺跡において前期の竪穴住居址が検出されている。

宿原地区周辺の中期・後期の集落は詳らかではないが志染中梨木遺跡において竪穴住居址が検出されている。また、宿原六萬廻跡は、古墳時代に遡る窯跡と考えられる。

奈良時代の遺跡は古墳時代の遺跡と重複して存在することが多い。宿原地区周辺では存在は宿原三昧

ノ下遺跡・宿原合ノ池遺跡において遺物の散布を見る他には明確ではないが、大塚出張遺跡・大塚遺跡や岩宮上畠ヶ遺跡、吉田南遺跡などにおいても、遺構や遺物の存在が確認されている。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡は宿原地区周辺においても多くなる。宿原寺ノ下遺跡・宿原岡



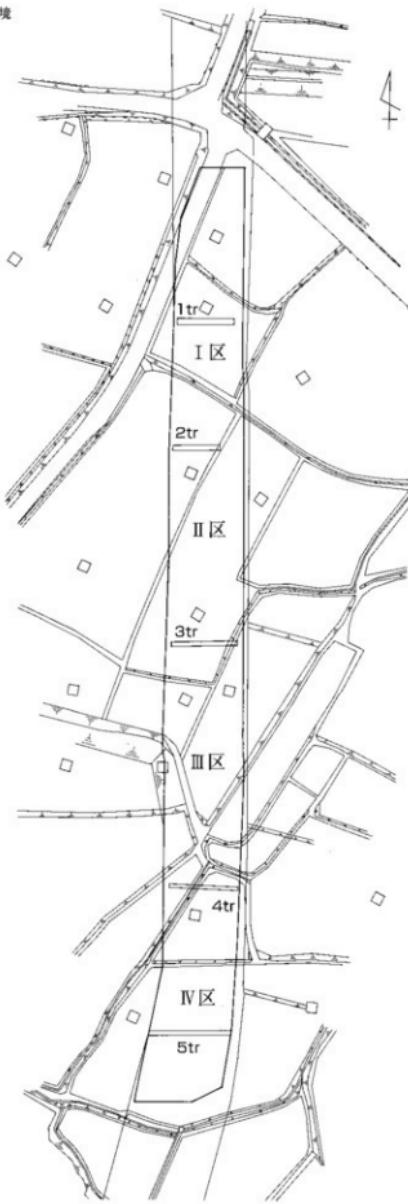
第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

ノ下遺跡・宿原三昧ノ下遺跡・宿原惣添遺跡などにおいて集落跡が確認されているほか、宿原窯跡・宿原大池窯跡など平安時代から鎌倉時代の窯跡の存在が確認されている。

室町時代から戦国時代の遺跡は、宿原地区周辺では、別所氏関連または、三木城攻めの遺跡として、宿原城跡や君ヶ峰城跡が存在している。

1 宿原寺ノ下遺跡	27 吉田南遺跡（第4地点）
2 宿原城跡	28 吉田南遺跡（第3地点）
3 宿原三昧ノ下遺跡	29 吉田中ノ坪遺跡
4 宿原岡ノ下遺跡	30 吉田南遺跡（第1地点）
5 宿原六萬窯跡	31 吉田南遺跡（第2地点）
6 大塚出張遺跡	32 東吉田遺跡（第1地点）
7 大塚遺跡	33 東吉田遺跡（第2地点）
8 大塚下り松遺跡	34 吉田住吉山遺跡
9 大塚瓢箪池遺跡	35 和田村四合谷村ノ口付城跡
10 岩宮上畠ヶ遺跡（第1地点）	36 吉田古墳群
11 岩宮上畠ヶ遺跡（第2地点）	37 吉田御春池遺跡
12 岩宮三割遺跡	38 細目古墳群（2号～4号）・細目南勝遺跡
13 岩壺神社遺跡	39 細目1号墳
14 岩宮藪ノ下遺跡	40 志染中梨木遺跡
15 加佐門田遺跡	41 志染中谷遺跡
16 三木城跡	42 安福田藏町散布地
17 大塚地獄谷池遺跡（第2地点）	43 平井山ノ上付城跡
18 大塚地獄谷池遺跡（第1地点）	44 長福寺廃寺跡
19 三谷ノ上付城跡	45 与呂木青葉台古墳群
20 二位谷奥付城B	46 与呂木東上野散布地
21 二位谷奥付城A	47 与呂木東上野古墳群
22 君ヶ峰城跡	48 与呂木宮ノ元遺跡
23 君ヶ峰古墳群	49 与呂木大畑遺跡
24 宿原大池遺跡	50 与呂木西界地遺跡
25 宿原窯跡（1号～3号）	51 宿原惣添遺跡
26 宿原窯跡（4号～5号）	

第1表 周辺の遺跡



第3図 調査区の配置図 (1/1,000)

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概要

宿原寺ノ下遺跡は、標高 55 m 前後の北向きの段丘上に展開する遺跡である。調査の結果、近世の石列、室町時代～戦国時代にかけての畠状造構（以上第1面）、鎌倉時代の建物群・木棺墓・土坑・溝、平安時代の土坑・溝（以上第2面）、弥生時代後期～末にかけての堅穴住居址状造構・溝、弥生時代中期～後期の遺物を検出した（以上第3面）。

遺跡は掌状の凹凸のある旧地形（地山）が、洪水による疊の供給によって埋まり、安定してゆく過程で形成されたもので、弥生時代後期もしくはそれ以前（第3疊層）、鎌倉時代と室町時代の間（第2疊層）、戦国時代～江戸時代初期（第1疊層）にかけての3時期には比較的多量の疊が供給され、地形が変化してゆくことが判明した。

調査区は全長 193 m・幅約 15 m を測り、北方へ傾斜した南北に長い長方形を呈している。この内、調査区の南半部と北端部には旧地形の凹部を埋めて疊が厚く堆積しており、南半部では隆起し、北端部では浅い谷を形成している。これに対して南半部の北よりから北半部のほぼ全域では疊の被覆は乏しく、安定した造構面が広がっており、造構も主としてこの部分に広がっている。

以下、調査区南半部と北半部そして北端部に分けて遺跡の状況を述べておく。

#### 調査区南半部の状況

南半部では第2疊層・第3疊層が厚く被覆している。このため、造構の分布は希薄である。

この内、調査区の南半部南半即ち南から 1/4 の範囲では、近世の水田に伴うと考えられる石列を 2 列、室町時代～戦国時代にかけての畠状造構及び、平安時代の土坑 1 基、時期・性格不明の土坑群を検出したに留まる。

畠状造構は調査区南端部で検出しており、幅 50 cm 前後の畠及び、幅約 1 m の幅をもつ短冊形の区画の 2 種を検出している。

平安時代の土坑は径 70 cm・深さ 25 cm、円形を呈し、内部より須恵器碗・瓦片が出土している。土坑 1 基以外には周辺には同時期の造構は検出されなかった。

時期・性格不明の土坑群は何れも第3疊層上より切り込む。不整な梢円形状のものが多く、断面形状はすり鉢状を呈す。埋土は焦茶色細砂・黒色細砂の 2 種存在する。埋土の状況から推して、前者は平安時代以前、後者は弥生時代後期前後の樹木の痕跡である可能性が高い。

調査区の南半部北半即ち南 2/4 の範囲からは北東方向に軸をもつ溝を検出している。

#### 調査区北半部の状況

調査区の北半部では第1疊層・第2疊層の被覆は乏しく、安定した造構面が検出されている。宿原寺ノ下遺跡において検出された造構の大半はこの範囲より検出されている。

検出された造構は室町時代～戦国時代にかけての土坑・鎌倉時代の掘立柱建物群・木棺墓・土坑、平安時代の集石土坑・溝、更に北半部では弥生時代後期～末にかけての堅穴住居址状造構（集石土坑）が検出されている。

これらの内、造構の中心を占めるものは平安時代後期から鎌倉時代の造構である。掘立柱建物は 9 棟

が復元できる。また、更に数棟が存在したものと考えられる。

建物の内、南側にある SB201・SB202 は比較的小規模なもので、遺構の希薄な空間を挟んで北側に SB203～SB208 が位置している。この遺構の希薄な空間からは木棺墓が検出されている。

SB203 は SB204 と重複し、更に調査区の東側に伸びるため規模は不明であるが、柱穴内に土器を埋納しており、SB204 に先行して建てられ、建物の廃棄時に丁寧に柱穴が埋められたものと考えられる。

木棺墓は調査区中央部西壁際に位置し、西端を排水側溝によって失っている。この地点は掘立柱建物群に挟まれた遺構の希薄な空間地である。

木棺墓の形状・規模は、西端を失っているため詳らかではないが、木棺の法量ぎりぎりに掘られたやや隅丸の長方形の墓擴をもつ。木棺の木質は消失していたが、東側小口及び両側板の痕跡が明瞭に残っていた。

棺内からは銅製和鏡 1 面・鉄製毛抜き 1 点・須恵器椀 1 点・須恵器小皿 2 点・刀子 1 点・小皿状の漆製品 1 点などが出土している。

堅穴住居址状遺構は調査区北半部より検出した。直径約 4.8 m・深さ約 0.3 m を測る円形の土壙である。遺構は上下 2 層に分かれ、上層には集石をもち、集石土坑の様相を呈している。下層は一段テラスをもって小さくなり、径 4 m 強の円形土坑となる。中央部には 4 個のピットと焼土が検出されている。

遺物は下層からは弥生時代後期～末と考えられる甕底部片が出土している。

遺構の性格は詳らかではないが、ピットと焼土の存在や全体の形状から推して、堅穴住居址の可能性が高い。

同様の円形の落ちが、更に北側の裸層上に存在するが、埋土が近世の搅乱土である可能性が高く、ピットや焼土・遺物は検出されなかった。

#### 調査区北壁の状況

第 3 裸層が谷部に被覆している。このため、遺構の分布は希薄である。第 3 裸層の上には黒色細砂・焦茶色細砂が堆積し、谷地形を埋没させている。黒色細砂中には弥生時代中期から後期の磨滅した土器が、焦茶色細砂中には奈良～平安時代の須恵器が混入している。これら黒色細砂・焦茶色細砂は調査区南半部に検出される落ち込みの埋土と同一と考えられる。

## 第 2 節 第 1 面の遺構について（図版 2）

第 1 面の遺構は、調査区の南半において近世の水田に伴う石列（石垣の基底部）が検出される以外は、南端において畠状遺構が検出されたのみである。

#### 畠状遺構（図版 2）

遺構は溝もしくは方形の区画からなるもので、溝や区画を構成する歓の幅は約 50 cm を測る。遺構の形状は調査区の中央を挟み東西で違いがあり、東側の幅 50 cm 前後の溝 4 本と歓によって構成された部分（畠状遺構 B）と、西側の幅約 1 m の間隔で幅をもつ短冊形の区画（畠状遺構 A）によって構成された部分とに分けることができる。東側の溝は、N 74° E の走行をもつ。西側の区画は、N 88° W の走行をもつ。

これらの遺構は第 1 裸層によって埋没しており、戦国時代に機能した遺構であると推測される。性格は詳らかではないが、検出された形状と遺構を構成する土質から推して、少なくとも畠状遺構 B は畠の可能性が高い。

### 第3節 第2面の遺構について（図版1・3）

第2面の遺構は第2疊層下から検出された遺構群である。調査区のほぼ全域に分布している。調査区南端には土坑及びピット群、南半部北半即ち南2/4の範囲には北東方向に軸をもつ溝（SD01）、北半部には9棟の掘立柱建物群と木棺墓1基、土坑13基・東西方向に走行をもつ溝5本を検出している。

調査区南端部の土坑及びピット群については不明な点が多い。土坑は径70cm・深さ25cm、円形を呈し、内部より須恵器碗・瓦片が出土しており、平安時代と考えられる。土坑1基以外には周辺には同時期の遺構は検出されなかった。

その他の土坑については時期・性格不明が不明であるが何れも第3疊層上より切り込んでおり第2面に伴うものとして扱っておく。

土坑群は不整な橢円形状のものが多く、断面形状はすり鉢状を呈す。埋土は焦茶色細砂・黒色細砂の2種存在する。埋土の状況から推して、前者は平安時代以前、後者は弥生時代後期前後の樹木の痕跡である可能性が高い。

調査区中央から北半部にかけては溝・掘立柱建物群と横列・木棺墓・土坑群が存在している。

掘立柱建物は9棟が復元できる。また、多数のピットが存在していることから、更に複数棟の建物が存在したと考えられる。

これらの建物は比較的遺構群のなかでは北よりに集中して検出されている。南側にあるSB201・SB202は比較的小規模なもので、遺構の希薄な空間を挟んで北側にSB203～SB209が位置している。

この遺構の希薄な空間には木棺墓SX205が位置している。

土坑は、SK220・SK221・SK222・SK236のほか集石土坑SX202が検出されているが、これらの土坑は建物の端に何れも位置しており、建物に伴った施設と考えることができる。

溝は計5本検出されている。この内、遺構群の南端を南北方向に走る溝SD201と北端を東西方向に走る溝SD205は、現況にもほぼ同位置に水田の区画としてその形状をとどめているが、その延長がほぼ直角に交わることから、掘立柱建物群と木棺墓・土坑群を大きく囲む1辺80m近い方形に巡る区画溝であった可能性が考えられる。

#### 掘立柱建物 SB201（図版3）

南北棟行3間（約6.8m）、東西梁行2間（約4.5m）の規模を測る。主軸をN69°Eにとる純柱建物である。径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は2.2mから2.3mを測る。

SB201はSB202と重複しているが先後関係は明確ではないが、柱穴の検出レベルに若干の差があり、SB201はSB202よりも後出した可能性が高い。

#### 掘立柱建物 SB202（図版3）

南北棟行3間（約9.0m）、東西梁行2間（約4.1m）の規模を測る。主軸をN63°Eにとる歪みの激しい純柱建物である。径約25cmの柱穴を使用しており、柱間は棟行では2.9m・3.0m・3.6mを測る。

SB202はSB201と重複しているが先後関係は明確ではないが、柱穴の検出レベルに若干の差があり、SB201がSB202よりも後出した可能性が高い。

SB202に伴う柱穴（P226・P235）からは土師器皿・黒色土器碗・須恵器皿・須恵器甕が出土している。これらの遺物は建物の廃棄時に柱穴に埋められたものと考えられる。

出土遺物からSB202は11世紀代に廃棄されたものと考えられる。

#### 掘立柱建物 SB203 (図版3・4)

南北3間(約6.9m)、東西3間(約8.0m)以上の規模を測る。主軸をN63°Eにとる竪柱建物である。径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は南北方向で2.1m・2.3m・2.5m、東西方向では2.5m・3.0mを測る。

SB203はSB204と重複しており先行する可能性が高い。またP267・P279の並ぶ南北の柱穴列、P256の並ぶ南北の柱穴列の存在はSB203に先行する建物の存在を推測させる。

SB203に伴う柱穴(P256・P266・P267)からは須恵器皿・須恵器枕・須恵器捏鉢が出土している。これらの遺物は建物の廃棄時に柱穴に埋められたものと考えられる。

出土遺物からSB202は11世紀代に廃棄されたものと考えられる。

また、土坑SK218は北西隅に収まって位置しておりSB203に伴う可能性が高い。

#### 掘立柱建物 SB204 (図版3・4)

南北桁行3間(約5.5m)、東西梁行2間(約4.8m)の規模を測る。主軸をN65°Eにとる竪柱建物である。径約25cmの柱穴を使用しており、柱間は南北方向で2.0m・1.5m、東西方向では2.1m・2.7mを測る。

SB204はSB203と重複しており柱穴が切り合い新しい。

土坑SK220は南西隅の1間分に収まって位置しており、SB204に伴うものと考えられる。

SB204はSB205と並行し、北縁をほぼ合わせて建てられている。並存していた可能性が高いと考えられる。

#### 掘立柱建物 SB205 (図版3・4)

南北5間(約10.0m)、東西5間(約10.5m)以上の規模を測る。南北軸をN67°Eにとる竪柱建物である。径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は南北方向で2.0m、東西方向では1.8m・2.0m・2.4mを測る。

建物はL字形のプランとして復元しているが、西側に伸び5間四方もしくは東西6間以上の規模を有していた可能性も残る。

SB205はSB204と並行し、北縁をほぼ合わせて建てられている。並存していた可能性が高いと考えられる。

土坑SK221・SK222及び径40cmを越えるP321は北西隅の1間分に収まって位置しており、SB205に伴うものと考えられる。また、SX203についても南東隅の一角に収まっており、SB205に伴う機能による所産の可能性も考えられる。

SB205に伴うP314・P320・P322からは土師器・須恵器小皿が出土している。これらの遺物は建物の廃棄時に柱穴に埋められたものと考えられる。

出土遺物からSB205は12世紀代に廃棄されたものと考えられる。

#### 掘立柱建物 SB206 (図版3・4)

南北棹行5間(約14.3m)、東西梁行2間(約5.0m)の規模を測る。主軸をN57°Eにとる長大な竪柱建物である。径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は棹行で2.8mと3.1m、梁行で2.5mを測る。

SB206はSB205・SB207と重複しているが先後関係は明確ではない。しかし、SB206の柱穴がSB205に伴う可能性の高いSX203によって埋没していること、他の建物群と異なる軸方位をもつことなどから、建物群のなかでは古く、SB206はSB205よりも先行した可能性がある。

#### 掘立柱建物 SB207 (図版3・4)

南北4間(約9.5m)、東西4間(約11.3m)の規模を測る。南北軸をN61°Eにとる竪柱建物である。

径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は南北方向で2.2m・2.5m、東西方向では2.7mを測る。

SB207はSB206・SB208・SA201と重複しているが先後関係は明確ではない。

#### 掘立柱建物 SB208 (図版3・4)

南北梁行2間(約5.0m)、東西棟行3間(約8.0m)の規模を測る。棟行をN21°Wにとる終柱建物である。

径約25cmの柱穴を使用しており、柱間は棟行方向で2.5m・3.0m、梁行方向では2.5mを測る。

SB208はSB206・SB207・SA201と重複しているが先後関係は明確ではない。

また、集石土坑SX202は北西隅に収まって位置しておりSB208に伴う可能性が高い。

#### 掘立柱建物 SB209 (図版3)

南北梁行1間(約2.5m)、東西棟行2間(約5.0m)の規模を測る。桁行をN23°Wにとる建物である。径約30cmの柱穴を使用しており、柱間は桁行方向で2.1m・2.7m、梁行方向では2.6mを測る。

#### 柵 SA201 (図版4)

SB208の南柵行に並行して全長約7.0m、5本の柱穴からなる。軸方位はN22°Wにとる。柱間は1.8m・1.2mを測る。

SB207と重複しているが先後関係は明確ではない。位置関係・軸方位から推してSB208に伴う柵と考えられる。

#### 木棺墓 SX205 (SK226・SK227) (図版5・6)

調査区中央部の西壁際より検出した。東西方向に主軸をもつ、木棺直葬墓である。

墓の構造は西端を排水渠溝によって失っているため、詳らかでない点も多いが、棺の東側の小口と両側板の痕跡が明瞭に残っており、隅丸長方形の墓壙ぎりぎりに木棺を取り、棺直上には石組みを施していたことが判明している。

墓壙は残存長170cm・幅66cm・深さ23cm、木棺は残存長140cm・内法幅43cm、現状で推定され側板材の厚みは約3.5cm・小口板の厚みは約6cmである。

上面の石組みは墓壙の長軸に沿って幅20cm前後の板石を並べ内側には拳大の石を集めている。集石内からは須恵器柄・皿・土器器甕・瓦片が出土している。

棺内からは、和鏡1面・鉄製毛抜き1点・須恵器椀1点・須恵器小皿2点・鉄製刀子1点・小皿状の漆製品1点及び鉄釘3点・銭貨片が出土している。鉄釘は、棺釘であろう。刀子は棺の中央付近から、それ以外の遺物は、棺の東半よりまとめて検出されている。

和鏡は、2枚の木片に挟まれ、北側板にもたれかかった状態で検出された。木片のうち上面即ち棺内側の木片には小孔1個穿たれている。また、周辺の埋土からは残存長5.0cm・幅8mm・厚み約2.5mmの曲げ物片が出土している。これは鏡箱の側板の用材であった可能性が高い。

鏡面は棺内を向いており、鏡背には布が付着していた。また、鏡の部分には苧麻製の紐が残っていた。

以上、出土状況から見て、鏡は、布に包まれ、円形の容器に収められていたと推測される。容器は板に残された穿孔の存在から紐をつけた円形の鏡箱と考えられ、棺にもたせかけて置いていたのであろう。

また近接する小皿状の漆製品は、上下を逆転して検出されており、直下から銭貨が出土している。この漆製品を紅皿と見て、周辺の有機質の存在から、毛抜きと共に鏡に近接して化粧箱が収められていた可能性もある。

鏡と共に副葬された須恵器椀・小皿の時期は、12世紀後半の時期が与えられる。木棺が、葬られた時期と捉えてても大過はないであろう。

**土坑 SK220 (図版4)**

全長 1.95 m・幅 1.20 m・深さ約 0.15 m を測る隅丸方形土坑である。断面形状は浅い皿状を呈する。

遺構の性格は不明であるが、SB204 南西隅の 1 間分に取まって位置しており、SB204 に伴うものと考えられる。

**土坑 SX202 (図版7)**

全長 1.60 m・幅 0.95 m・深さ約 0.20 m を測る隅丸方形土坑である。土坑上層には径 10 cm から 25 cm の石とともに須恵器碗・須恵器鉢・土師器壺片が検出されている。時期は 12 世紀前半と考えられる。

遺構の性格は不明であるが、SB208 北西隅の 1 間分に取まって位置しており、SB208 に伴うものと考えられる。

**土坑 SK236 (図版7)**

全長 2.50 m 以上・幅 1.10 m・深さ約 0.40 m を測る不整な隅丸長方形土坑である。断面形状は深い箱形を呈する。

土坑内からは、土師器皿・碗、黒色土器碗・須恵器皿・碗、土師器壺・羽釜など大量の土器が出土している。時期は 11 世紀と考えられる。

遺構の性格は不明である。

## 第4節 第3面の遺構について

第3面の遺構は第3礫層上から検出された弥生時代後期の遺構群である。調査区の北半部に分布している。調査区北半には堅穴住居址状遺構 2 基、北端部からは先述したように谷部が確認されている。

**堅穴住居址状遺構 SX201・SX203 (図版8・9)**

堅穴住居址状遺構 SX201 は調査区北半部より検出した。直径約 4.8 m・深さ約 0.3 m を測る円形の土坑である。遺構は上下 2 層に分かれており、上層には径 20 cm 前後の自然石からなる集石をもち、集石土坑の様相を呈している。集石内には中世に下る遺物が混ざっており、上層の土坑は中世に形成された集石土坑と理解できる。

下層は一段テラスをもって小さくなり、径 4.2 m の円形土坑となる。中央部には径 30 cm ~ 40 cm のビット 4 個と焼土が検出されている。

遺物は下層からは弥生時代後期～末と考えられる壺底部片が出土している。

遺構の性格は詳らかではないが、ビットと焼土の存在や全体の形状から推して、堅穴住居址の可能性が高い。

同様の円形の落ちが、更に北側の礫層上に存在するが SX203、埋土が近世の擾乱土である可能性もあり、ビットや焼土・遺物は検出されなかった。

SX201・SX203 以北では第3礫層が谷部に被覆して検出されている。このため、遺構の分布は希薄となっている。第3礫層の上には黒色細砂・焦茶色細砂が堆積しており、谷地形を埋没させている。黒色細砂中には弥生時代後期の磨滅した土器が、焦茶色細砂中には奈良～平安時代の須恵器が混入している。これら黒色細砂・焦茶色細砂は調査区南半部に検出される落ち込みの埋土と同一と考えられる。

## 第5節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は 28 箱入りコンテナにして 30 箱前後である。遺構に伴って出土したもののは、住居址から出土した弥生時代後期の遺物と掘立柱建物に伴う柱穴・木棺墓・土坑から出土した 11 世紀から 12 世紀にかけての遺物がある。

包含層については弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代・戦国時代の多岐に涉る時期の遺物が出土している。

以下、遺構の遺物を主として述べてゆく。

### 掘立柱建物 SB202 の遺物（図版 10）

SB202 に係わる遺物として、柱穴 P235・P226 出土の遺物がある。

柱穴 P235 出土の遺物として、(1) から (3) を図示した。

(1) は口縁部が短く外方へ開く浅い土師器皿である。口縁端部は若干肥厚し、面をもつ。口縁部はロクロナデ、底部内面にはナデ調整を施す。外面の調整は摩滅し不明である。

(2) は口縁部が強いヨコナデ調整によって若干外反する深い土師器皿である。

(3) は黒色土器碗の底部である。高台部は貼り付けられ、断面形状は三角形、端部は心持ち外反する。柱穴 P226 出土の遺物として、(4) を図示した。最大径を頸部直下の肩部にもち、筒形のプロポーションをもつ須恵器壺である。口縁端部は面をもち、内側は強いナデによって窪む。体部外面は水平方向に叩き調整を施した後、部分的に斜めに叩き調整を施している。

### 掘立柱建物 SB203 の遺物（図版 10）

SB203 係わる遺物として、柱穴 P266・P256・P267 出土の遺物がある。

柱穴 P266 出土の遺物として、(5) から (7) を図示した。

(5) は口縁部が内湾気味に外方へ立ち上がる深い須恵器小皿（深さ約 1.5 cm を測る）である。口縁端部は若干肥厚し、丸みを帯びる。口縁部はロクロナデ、底部外面には回転糸切りを施す。

(6) は須恵器碗である。口縁部を欠く。体部は丸みを帯びて立ち上がる。底部内面中央は一段窪む。底部外面は回転糸切りを施されているが、底部の突出はごく僅かである。

(7) は須恵器碗である。体部が内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は丸みを帯びる。底部は心持ち突出する。底部外面には回転糸切りを施す。

(8)(9) は柱穴 P256 出土の遺物である。(8) は須恵器碗である。体部が内湾気味に立ち上がり口縁端部は肥厚しやや外反する。底部との境は強いナデによって窪みをみせる。底部は心持ち突出する。底部外面には回転糸切りを施す。

(9) は須恵器捏鉢である。直線的に外方は立ち上がる体部に、口縁端部は内傾し面をもつ。底部外面はナデ調整を施す。

(10) は柱穴 P267 出土の遺物である。須恵器碗である。体部が内湾気味に立ち上がり口縁端部は肥厚しやや外反する。底部は心持ち突出する。底部外面には回転糸切りを施す。

### 掘立柱建物 SB205 の遺物（図版 10）

SB205 係わる遺物として、柱穴 P314・P322・P320・P314 出土の遺物がある。

(11) は柱穴 P314 出土の遺物である。口縁部が短く外方へ開く浅い土師器小皿である。口縁端部は丸く肥厚する。底部外面には回転糸切りを施す。

(12) は柱穴 P322 出土の遺物である。口縁部が短く外方へ開く浅い土師器小皿である。口縁端部は心持ち外反する。底部外面には回転糸切りを施す。

(13) は柱穴 P320 出土の遺物である。口縁部が短く外方へ開く浅い土師器小皿である。口縁端部は丸く肥厚する。底部外面には回転糸切りを施す。

(14) は柱穴 P320 出土、(15) は柱穴 P314 出土の遺物である。ともに口縁部が短くやや丸みを帯びて立ち上がる浅い須恵器小皿である。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転糸切りを施す。

#### その他の柱穴の遺物 (図版 10)

(16) は柱穴 P430 出土の遺物である。口縁部が短くやや丸みを帯びて立ち上がる須恵器小皿である。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転糸切りを施す。

(17) は柱穴 P382 出土の遺物である。体部口縁部が斜め外方に真直ぐ立ち上がる土師器皿である。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転糸切りを施す。

(18)・(19) は柱穴 P269 出土の遺物である。

(18) は土師器碗である。口縁部を欠く。体部は直線的に立ち上がる。底部外面には回転糸切りを施す。

(19) は須恵器碗である。体部が内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は丸みを帯び、外反する。底部は平底である。底部外面には回転糸切りを施す。

(20) は P253 に接して出土した須恵器碗である。体部が直線的に外方へ立ち上がり口縁端部は外反する。底部は突出する。回転糸切りを施す。

(21) は P375 から出土した須恵器碗である。体部下半・底部を欠く。体部は内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は肥厚し、外反する。

#### 土坑 SK236 の遺物 (図版 11)

(22) から (42) を図示した。

(22) は土師器皿である。丸みを帯びた平底から体部・口縁部が直線的に外方へ立ち上がる。

(23) は土師器杯もしくは深い皿と捉えられるものである。体部が直線的に外方へ立ち上がり口縁端部は外反する。

(24) から (29) は土師器碗である。何れも底部内面が一段落ち込み、外見上は突出した底部をもつものである。底部外面は回転糸切りを施す。或いは糸引きの後ナデを施す。

(24)・(25) は口縁端部が外上方へ伸びる。(25) はやや浅く、托盤形に近い器形である。

(26)・(27) は口縁端部が外反する。底部内面が一段落ち込みは丸みを帯びる。(27) の底部は外側へ踏ん張り台形状となる。

(28)・(29) はともに土師器碗の下半である。底部内面の形状からは (28) は (26)・(27) に近く、(29) は (24)・(25) に近い形状の個体と考えられる。

(30) は土師器碗である。厚い輪高台の底部、体部は内湾気味に外方へ立ち上がり口縁部は直口する。体部内外面には指押さえによる調整痕が残る。底部内面は丸みを帯び一段落ち込む。高台は外方へ若干踏ん張りをみせる。

(32) は黒色土器碗である。内外面ともに横方向へのヘラ磨きを施した後、口縁部をナデ調整している。

(33) は黒色土器皿である。内面に炭素が吸着する所謂、内黒土器である。断面三角形の貼り付け高台をもつ。

(34) は土師器台付き鉢の脚部である。底部内面は若干盛り上がりをみせる。

(35)・(36)は土師器甕である。(35)は長胴の体部に「くの字」に開く口縁部をもつ。口径と最大腹径をほぼ同じにする。体部外面は横ナデ、内面は板状工具によるナデ調整を施す。(36)は最大径を腹径にもつ、丸みを帯びた体部に「くの字」に開く口縁部をもつ。外面には継刷毛調整を施す。(35)・(36)は何れも口縁端部をつまみ上げ、外側面に擬凹線をもつ。

(37)は土師器羽釜である。長胴の体部に断面三角形の短い鶴、短く若干内傾するごく短い口縁部をもつ。体部外面には継方向の刷毛調整・内面には横方向の刷毛調整を施す。

(38)は土師器甕である。長胴の体部に「くの字」に開く口縁部をもつ。最大径を口径にもつ。口縁端部はつまみ上げ、内傾する。体部外面は横方向の叩きの後、上半部はナデ消す。内面はナデ調整を施す。

(39)は須恵器皿である。口縁部が外方へ開く。口縁端部は丸く収める。底部は若干突き出し、外面には回転糸切りを施す。

(40)から(42)は須恵器椀である。

(40)・(42)は丸みを帯びて立ち上がる体部に短く外反する口縁端部をもつ。(42)は突出する底部をもち、外面には回転糸切りを施す。

(41)は外方へ直ぐ立ち上がる体部に、丸く肥厚する口縁端部をもつ。

#### 木棺墓 SX205 (SK226・SK227) の遺物 (図版 12)

(43)から(45)は棺内から出土した土器である。棺内からは、これ以外に、M1からM3、W1からW3が出土している。

(43)・(44)は須恵器小皿である。ともに強いヨコナデによって口縁部が心持ち外反する。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転糸切りを施す。底部との境には稜をもつ。

(45)は須恵器椀である。体部が心持ち内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は丸みを帯びる。底部はほとんど突出しない。底部外面には回転糸切りを施す。

(46)は龍泉窯系劃花文青磁碗口縁部の破片である。小破片のみ出土しており、棺内に混入した可能性が高い。

(47)・(50)から(55)は木棺墓上面の石組みから出土した遺物である。

(47)は須恵質の平瓦である。凹面には布目痕・糸切り痕、凸面には継方向のナデ調整が残る。

(50)から(53)は須恵器椀である。何れも、体部が心持ち内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は丸みを帯びる。底部は平底、突出しない。底部外面には回転糸切りを施す。

(50)は口縁端部が強いヨコナデによって口縁部が心持ち外反する。端部は丸く肥厚している。

(51)・(52)は口縁部が直ぐ立ち上がり、外反をみせない。端部は丸く収める。

(54)は須恵器皿である。体部が緩やかに内湾気味に外方へ立ち上がり口縁端部は肥厚し丸みを帯びる。底部は平底、突出しない。

(55)は土師器甕である。口縁部は「くの字」に開く。頸部直下には内外面ともに横方向の刷毛を施し、外面下半には叩き調整を施す。

#### 土坑 SX202 出土の遺物 (図版 12)

(62)から(68)は SX202 出土の遺物である。

(62)は土師器甕である。口縁部は「くの字」に開き肥厚する。頸部以下、外面には叩き調整を施す。

(63)は須恵器椀である。体部が心持ち内湾して立ち上がり口縁端部は外反する。外面体部の下半には沈線が巡る。器壁は全体に薄い作りである。

(64) から (67) は須恵器碗である。体部が心持ち内湾気味に立ち上がり口縁端部は真直ぐ外方に伸び、ほとんど外反しない。底部は突出する。底部内面は一段窪む。底部外面には回転糸切りを施す。

(68) は須恵器鉢である。片口鉢の可能性が高い。丸みを帯びる体部に短く外半する口縁部をもつ。端部は面をもち、内傾する。

#### その他の土坑の遺物（図版 12）

(56) から (61) には、個別の遺構図を図示しなかった土坑の遺物をあげた。

(56)・(57) は SK241 出土の遺物である。

(56) は土師器碗の底部である。外へ踏ん張る高台を貼り付けている。

(57) は須恵器碗の底部である。突き出し、底部内面は一段窪む。底部外面には回転糸切りを施す。

(58)・(59) は SK221 出土の遺物である。ともに須恵器碗である。体部が心持ち内湾気味に立ち上がり口縁端部は真直ぐ外方に伸び、ほとんど外反しない端部は肥厚し丸く収める。底部はほとんど突出しない。(59) の底部外面には回転糸切りを施す。

(60) は SK253 出土の須恵器小皿である。口縁部は短く外方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収める。底部外面には回転糸切りを施す。底部との境には稜をもつ。

(61) は SK238 出土の須恵器鉢である。体部は外方へ真直ぐに立ち上がる。口縁端部は上方に拡張し面をもつ。底部外面には回転糸切りを施す。

(69) から (73) は弥生時代後期の遺物をあげた。

#### 豊穴住居址状遺構 SX201 の遺物（図版 13）

(69) から (71) は SX201 から出土した壺底部である。何れも心持ち突出した形状をもち、(70)・(71) には外側面に指押さえ痕が残る。

#### 谷部出土の遺物（図版 13）

(72) は調査区北端の谷部上層から出土した壺底部である。心持ち突出した形状を持ち外側面に叩き調整痕が残る。

#### 包含層出土の遺物（図版 13）

以下、遺構に直接伴わない包含層出土の遺物をあげる。弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代前期・平安時代後期から鎌倉時代・戦国時代の時期に涉る。

(73) は包含層出土の弥生時代後期の高杯脚部である。内面にはしばり痕が観察できる。

(74) は古墳時代後期の須恵器はそうである。

(75) は須恵器接觸の口縁部から体部である。口縁部は薄く、外反し、端部は水平に伸びる。

(76) は須恵器杯身である。高台は体部近くに貼り付けられている。

(77) は土師器擂鉢の口縁部である。畠状遺構に被覆した洪沢砂中より出土した。外反した口縁部直下に稜をもつ。内面及び外面の稜以下には横方向の刷毛調整を施す。16世紀後半の時期が与えられる。

(78) は土師器鍋である。畠状遺構に被覆した洪沢砂中より出土した。口縁端部に面をもつ。口縁部直下に強くヨコナデを施し、弱い凸帯状の鈴の痕跡を作り出している。体部外面には叩き調整を施す。

(79) は土師器鍋である。畠状遺構を構成する鉢内より出土した。口縁端部上に内傾する面をもつ。口縁部直下に強くヨコナデを施し、弱い凸帯状の鈴の痕跡を作り出している。

(80) から (86) は須恵器小皿である。何れも底部外面には回転糸切りを施す。

(80) は口縁部が緩やかに内湾し端部は丸く肥厚する。

- (81)・(82)は口縁部が外方に開き端部は丸く肥厚する。
- (83)・(84)はともに強いヨコナデによって口縁部が短く、心持ち外反する。口縁端部は丸く収める。底部との境には稜をもつ。
- (85)は口縁部が内湾気味に立ち上がる。やや深い器形である。
- (86)は底部境から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は強いナデによって外反する。やや深い器形である。
- (87)は須恵器壺である。中世の遺物包含層より出土している。口縁部・肩部を欠く。筒形の胴部には内外面ともにロクロ目が顕著である。底部は平底で、回転糸切りを施す。
- (88)から(90)は須恵器捏鉢である。
- (88)は須恵器捏鉢である。体部は外方へ開き、口縁端部は面をもち、外傾する。底部は心持ち突出する。外面は回転糸切りを施す。
- (89)は須恵器捏鉢である。口縁部は上方へ拡張し、肥厚して外側に面をもつ。
- (90)は須恵器捏鉢の底部である。平底で、回転糸切りを施す。
- (91)は須恵器もしくは無釉陶器の範疇に入る鉢の口縁部である。端部は丸く収められる。
- (92)・(93)は備前焼と考えられる無釉陶器である。
- (92)は短頸壺である。畠状造構に被覆した洪砂より出土した。水平に大きく肩を張り、口縁部は短く突出する。
- (93)は壺底部である。板状工具による撫で上げが観察される。
- (94)から(102)は輸入磁器を示した。
- (94)は白磁端反り口縁碗片である。口縁端部は水平に拡張した面をもつ。
- (95)は白磁端反り口縁皿片である。畠状造構に被覆した洪砂と同一層より出土した。
- (96)は白磁小碗の底部と考えられる。高台裏は露胎である。
- (97)は龍泉窯系劃花文青磁碗口縁部の破片である。
- (98)は青白磁皿底部片である。畠状造構を構成する歓内より出土した。内面に輪花と考えられる陰刻がある。高台裏には朱錆を塗布する。
- (99)は青磁無文碗である。
- (100)は青磁細蓮弁文碗である。劍頭と細線が単位を成さない。
- (101)は青磁細蓮弁文碗である。劍頭と細線が単位をもつ。畠状造構に被覆した洪砂より出土した。
- (102)は青磁蓮弁文碗である。畠状造構を構成する歓内より出土した。蓮弁は大振りで、鎬は省略され、浮き彫りも弱い。
- (103)・(104)は須恵器の平瓦である。ともに第2面に伴う包含層より出土した。
- (103)は凹面には布目痕、凸面には縱方向のナデ調整が残る。
- (104)は凹面には布目痕、凸面には叩き整形痕が残る。
- (105)から(115)は写真のみあげた。
- (105)・(106)は土師器擂鉢である。
- (105)は底部である。内面には粗いヨコ刷毛と4条(以上)の擂り目が施される。
- (106)は外反した口縁部直下に段化した後をもつ。内面には横方向の刷毛調整を施す。16世紀後半代の時期が与えられる。

(107)・(108)は瀬戸・美濃製天目茶椀片である。底部に近く大半が露胎の部分である。

(109)から(115)については輸入磁器をあげた。

(109)は青磁蓮弁文碗である。劍頭が無く、細線のみ描かれている。

(110)・(111)は白磁玉縁口縁碗である。(111)はSX201の上半より出土している。

(112)は白磁壺部片である。

(113)・(114)は明染付け碗片である。

(115)は明染付け皿底部片である。

#### 金属製品（図版14）

金属製品は4点図示した。

木棺墓SX205出土の金属製品は、3点図示した。棺内からM1からM3が出土している。

M1は『荒磯文双禽鏡』である。遺構の項において述べたように、本鏡は布に包まれ、鏡箱に收められ、木棺内に副葬されていたと考えられる。

本鏡は、鏡背部に布が付着していたため、文様等が明らかではなかったが、京都国立博物館 久保智康氏に実見していただき、漸く概要及び年代観が明らかとなった。

以下、久保氏の所見に依拠し、概要を述べていくこととする。

鏡形は円形である。

鏡の大きさは、面径8.6cm、厚さは縁高0.6cm、縁幅0.3cmを測る。

鏡縁は直角式の細縁である。鉢はやや退化した菊形鉢座をもつ。

界隈は、内側の傾斜がなだらかで、外側が急な「へ」字型と呼ばれるものである。

文様は、蓬萊文鏡（鎌倉時代に盛行する）の原型と捉えられるモチーフをもつ。鏡背部の右方には岩の上に生える松樹があり。左方には双禽が配されている。松とセットで用いられる鳥は、鶴であることが多い。本鏡の鳥についても鶴である可能性が高いが、嘴が短く、長い脚がない点に加え、鳥の下方に葦が描かれていることから、雁とも考えられる。また、鏡の下方には、やや形式化した磯に打ち寄せる波が表現されている。

本鏡の時期は、やや退化した菊形鉢座の存在、蓬萊文鏡の原型と捉えられるモチーフをもつ点から、12世紀中頃の年代観が与えられる。

鏡は文様・形式から、12世紀中頃の年代観が与えられ、蓬萊文鏡の古い例と捉えることができる。

M2は鉄製毛抜きである。全長11.2cm、刃先付近で幅は7mm、厚みは4mm、根元付近で幅8.5mm、厚みは5mmを測る。

M3は鉄製刀子である。全長10.15mm、刃部は片刃で、長さは5.2mm、幅1.2mm、厚さ約0.5mm、柄部分には糸が巻かれており、幅は6mm前後、厚みは約2mm前後である。

図化できた金属製品は3点であるが、それ以外に銅鏡が出土している。

その他の金属製品は、1点図示した。

M4は鉄製刀である。全長27.0cm、刃部は片刃で、長さは22.5cm、幅は刃の根元で3.1cm厚さは峰で約1.3cmを測る。中子の幅は1.85cm、厚みは4.5mm、目釘穴の径は5mmを測る。

#### 石製品（図版14）

2点図示できた。

S1は砂岩製の直方体の製品である。全長3.95cm、幅2.04cm、厚み0.95cmを測る。片面の4隅の角の

面を見る。性格は不明である。

S2はチャート製の石核である。

以下、概要を藤田 淳氏のコメントに沿って述べていく。

本石製品はチャートの扁平な亜角砾を素材としている。片面に上下両方向からの剥離痕をとどめる。上側からの剥離は平坦で、裸面付きの剥片が剥取されている。剥片の形は方形状で石器素材となりうると考えられる。下側からの剥離は階段状になっており良好な剥片は得られていない。以上である。

#### 木製品（図版14）

3点図示できた。いずれも木棺墓SX205から出土している。

W1は木棺墓SX205出土和鏡の上面にのっていた本片である。残存する長径約12.4cm、短径約9.85cm、厚みは最大1.1cm、平均約6.5mmを測る。本片の表面は腐食し傷みが激しいが、裏面即ち鏡側は非常に平滑に仕上げられている。また、中央には3mm弱の孔が貫通している。この孔の存在から本材は鏡箱の蓋であった可能性が高いと考えられる。

出土当初は、本材には漆が塗布されていると考えられていたが、今回、再度実見した所、漆の塗布は確認されなかった。本稿をもって訂正とする。

W2は木棺墓SX205出土和鏡の下面から出土した本片である。残存する長径約11.5cm、短径約9.9cm、厚みは4mmを測る。遺存する健常な部分の存在から推して、本片の形状は、元々径12cm程度の円形であり、縁は丸く面取りされていたと考えられる。本材は鏡箱の底板であった可能性が高いと考えられる。

また、鏡に接触する側には鏡との接触による瑕がついている。

出土当初は、本材には漆が塗布されていると考えられていたが、今回、再度実見した所、漆の塗布は確認されなかった。本稿をもって訂正とする。

W3は木棺墓SX205の棺内から出土した漆椀もしくは皿である。土圧を受け、全体に歪んでおり、形状詳らかではない。残存状態は悪く、内外面の黒漆皮膜が残るのみである。残存する高台の径は約5cm、高台の幅は7mm程度である。本漆製品は天地が逆転して検出されており、内部からは銅鏡が出土している。

出土遺物觀察表

No	器種	種別	口径	器高	底径	出土遺構・層位	備考
01	土師器	皿	10.6	1.3	7.15	P-235	
02	土師器	皿	(10.7)	1.85+		P-235	
03	黑色土器	椀		2.2+	(9.9)	P-235	
04	須恵器	甕	(23.2)	28.35+	(18.2)	P-226	
05	須恵器	小皿	(8.8)	2.2+	(5.2)	P-266	
06	須恵器	椀		2.95+	5.7	P-266	土器10
07	須恵器	椀	(16.4)	5.3+	(6.2)	P-266	土器9
08	須恵器	椀	15.6	5.3	6.45	P-256	
09	須恵器	捏鉢	(27.8)	12.2+	(12.9)	P-256	
10	須恵器	椀	15.2	5.9+	(6.1)	P-267	土器1
11	土師器	小皿	(8.0)	1.35+	(6.2)	P-314	
12	土師器	小皿	7.95	1.2	5.6	P-322	
13	土師器	小皿	7.75	1.15	5.7	P-320	
14	須恵器	小皿	8.6	1.45	5.55	P-320	
15	須恵器	小皿	(8.2)	1.4+	(5.3)	P-314	
16	須恵器	小皿	8.35	1.55	6.3	P-430	
17	土師器	小皿	(10.5)	2.1+	(6.1)	P-382	
18	土師器	椀		3.05+	(6.8)	P-269	土器8
19	須恵器	椀	16.6	5.1	5.8	P-269	土器1
20	須恵器	椀	(14.6)	5.5+	6.4	P-253	
21	須恵器	椀	(16.1)	3.7+		P-375	
22	土師器	小皿	(9.8)	2.5+	(4.1)	SK-236	
23	土師器	小皿	(10.9)	3.15+	(6.5)	SK-236	土器22
24	土師器	椀	(12.0)	4.5+	(5.5)	SK-236	
25	土師器	椀	(12.0)	3.8+	(5.0)	SK-236	土器15、16
26	土師器	椀	(12.6)	4.35+	(5.6)	SK-236	土器12
27	土師器	椀	(12.1)	4.7+	(5.5)	SK-236	土器23
28	土師器	椀		3.45+	(6.0)	SK-236	土器24
29	土師器	椀		2.05+	(5.8)	SK-236	
30	土師器	椀	(15.4)	5.15+	(6.5)	SK-236	土器10
31	土師器	椀		2.35+	(7.8)	SK-236	土器22
32	黑色土器	椀	(12.8)	4.75+		SK-236	土器7

出土遺物觀察表 I

No	器種	種別	口徑	器高	底徑	出土遺構・層位	備考
33	黑色土器	皿		1.6+	(7.9)	SK-236	土器21
34	土師器	鉢		2.5+	(7.8)	SK-236	土器1
35	土師器	甕	(13.8)	11.85+		SK-236	土器21
36	土師器	甕	(15.0)	8.1+		SK-236	
37	土師器	羽釜	(21.6)	21.75+		SK-236	土器2
38	土師器	甕	(27.0)	25.1+		SK-236	
39	須惠器	皿	(10.9)	2.25+	(5.8)	SK-236	土器3
40	須惠器	椀	(13.5)	4.3+		SK-236	土器3
41	須惠器	椀	(16.2)	3.5+		SK-236	
42	須惠器	椀	(15.8)	5.75+	(6.3)	SK-236	土器11
43	須惠器	小皿	7.25	1.6	4.65	SX-205(SK-226)	小皿1
44	須惠器	小皿	7.4	1.25	4.5	SX-205(SK-226)	小皿2
45	須惠器	椀	16.45	4.45	6.1	SX-205(SK-226)	
46	磁器	椀		2.9+		SX-205(SK-226)	
47	瓦	平瓦				SX-205(SK-226)	縫16.7 高3.8 厚1.3~1.5 土器8
48	須惠器	小皿	7.75	1.5+	(5.75)	SK-224	
49	土師器	小皿	7.1	1.2	5.85	SK-222	
50	須惠器	椀	(17.0)	4.9+	(5.7)	SX-205(SK-227)	土器4
51	須惠器	椀	(16.2)	4.4+	(6.0)	SX-205(SK-227)	
52	須惠器	椀	(15.7)	4.45+	(7.8)	SX-205(SK-227)	土器3
53	須惠器	椀		3.4+	(5.3)	SX-205(SK-227)	
54	須惠器	皿	(14.5)	2.95+	(6.9)	SX-205(SK-227)	土器5
55	土師器	甕	(23.7)	6.8+		SX-205(SK-227)	
56	土師器	椀		2.75+	(7.6)	SK-241	
57	須惠器	椀		2.65+	(6.1)	SK-241	
58	須惠器	椀	(14.8)	3.5+		SK-221	
59	土師器	椀	15.8	4.9	5.15	SK-221	
60	須惠器	小皿	(7.6)	1.45+	(5.2)	SK-253	
61	須惠器	鉢	(27.0)	10.65+	(9.8)	SK-238	
62	土師器	甕	(27.6)	7.9+		SX-202	
63	須惠器	椀	(16.9)	5.6+		SX-202	
64	須惠器	椀	(13.8)	5.2+	5.05	SX-202	

出土遺物觀察表II

出土遺物観察表

No	器種	種別	口径	器高	底径	出土遺構・層位	備考
65	須恵器	椀	(13.6)	4.85+		SX-202	
66	須恵器	椀	(15.2)	5.7+	(5.95)	SX-202	
67	須恵器	椀		1.9+	(6.1)	SX-202	
68	須恵器	鉢	(29.8)	7.1+		SX-202	
69	弥生	甕		2.2+	(6.0)	SX-201	南鞋内
70	弥生	甕		1.8+	(3.85)	SX-201	土器B
71	弥生	甕		2.2+	(4.5)	SX-201 下層	
72	弥生	甕		2.15+	(5.4)	谷部褐色シルト黒(上半)	
73	弥生	高杯		7.8+		床土下褐色シルト質細砂	
74	須恵器	はそう		7.0+	9.35	濃灰褐色シルト細砂	
75	須恵器	椀		5.5+		第2疊層中	
76	須恵器	壺		3.0+	(14.1)	第2疊層中	
77	土師器	搗鉢		3.9+		水田A 耕土下褐色疊混層	
78	土師器	鍋	(20.0)	5.4+		水田A 堀? 暗褐色疊混層	
79	土師器	鍋	(20.1)	3.2+		水田A 灰褐色シルト細砂層の下	
80	須恵器	小皿	(9.2)	1.55+	(6.6)	No7周辺 ベース面まで	
81	須恵器	小皿	7.8	1.15	5.2	No3~4間 灰褐色シルト	土坑
82	須恵器	小皿	(8.5)	1.65+	(6.1)	東側側溝	
83	須恵器	小皿	7.8	1.65	4.4	No7周辺 ベース面まで	
84	須恵器	小皿	(7.6)	1.4+	(5.0)	No6東半周辺ベース面まで	
85	須恵器	小皿	(8.1)	2.15+	(4.3)	No8東半周辺ベース面まで	
86	須恵器	小皿	(8.0)	2.15+	(4.8)	No7~6東半 ベース面まで	
87	須恵器	壺		12.25+	(11.9)	No6杭付近 耕土より3層目	東側側溝
88	須恵器	搗鉢	(26.2)	10.5+		No6杭付近 耕土より3層目	東側側溝
89	須恵器	捏鉢	(27.2)	4.1+		水田A 機械掘削 褐色疊混土	
90	須恵器	捏鉢		2.2+	(10.4)	水田A 北側疊層	水田拡張時のものか?
91	須恵器	鉢	(24.0)	3.95+		耕土下2層目疊混	
92	備前焼	壺	(12.0)	2.45+		水田B 耕土下褐色疊混層	マンガン含む
93	備前焼	壺		5.7+	(11.0)	水田A 北側疊層	水田拡張時のものか?
94	白磁	碗	(14.5)	1.85+		水田Aサブトレ1 黒褐色疊混シルト	
95	白磁	皿	(10.0)	2.2+		水田B 耕土直下	褐色疊混層
96	白磁	小碗		1.5+	(3.4)	水田A北側 床土下褐色疊混層	

出土遺物観察表III

No	器種	種別	口径	器高	底径	出土遺構・層位	備考
97	青磁	碗		2.0+		水田A 黃褐色礫混層	
98	青白磁	皿		0.7+	(4.0)	水田A畠 灰褐色シルト質細砂	畠内
99	青磁	碗	(11.7)	2.7+		水田A 耕土下褐色礫混層	
100	青磁	碗	(13.3)	3.2+		北半水田B 西側構内	
101	青磁	碗	(10.1)	4.15+		水田A畠 暗褐色礫層	土器8
102	青磁	碗	(13.8)	3.8+		水田畠 灰褐色シルト質細砂	畠内
103	瓦	平瓦				STR1より北 第2礫層	縦12.15 高5.0 厚1.45~1.6
104	瓦	平瓦				STR1拡張 煙のベース下	縦15.05 高4.0 厚2.25
105	土師器	擂鉢				耕土直下褐色礫層	写真図版⑥
106	土師器	擂鉢				耕土直下褐色礫混層	写真図版⑥
107	瀬戸美濃	天目				耕土下褐色礫混層 マンガン含	写真図版⑧
108	瀬戸美濃	皿				SK-216	写真図版⑧
109	青磁	碗				畠状遺構 溝1 マンガン層	写真図版⑧
110	白磁	碗				褐色礫混土	写真図版⑧
111	白磁	碗				SX-201上層	写真図版⑧
112	白磁	壺				STR1より北畑耕土下層第2面	写真図版⑧
113	明染付け	碗					写真図版⑧
114	明染付け	碗				耕土下礫層	写真図版⑧
115	明染付け	皿				耕土下褐色礫層	写真図版⑧
M1	鉄	和鏡				SX-205(SK-226)	8.6×8.65
M2	鉄	毛抜き				SX-205(SK-226)	長さ 11.2
M3	鉄	刀子				SX-205(SK-226)	長さ 10.15
M4	鉄	小刀				SX-205(SK-226)	長さ27.0 厚さ1-0.2~0.5 2-0.2 ~0.7 3- 0.45
S1	石製品	不明					3.95×2.04 厚さ0.9
S2	石製品	石核					6.00×3.95 厚さ1.6
W1	鏡箱	蓋				SX-205(SK-226)	12.4×9.85 厚さ0.65
W2	鏡箱	底				SX-205(SK-226)	11.5×9.9 厚さ0.4
W3	漆製品	椀		(5.0)	SX-205(SK-226)	棺内出土の漆器	

## 第IV章 出土和鏡の分析

木棺墓より出土した和鏡（M1）の保存処理を行うにあたり、出土から3ヶ月後の平成9年11月に金属製品保存処理担当の加古千恵子が、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室において肥塚隆保室長の指導と助言を得て、蛍光X線分析による材質調査を行ったので報告する。

### 1. 分析対象試料

分析の対象となる試料は、荒磯文双禽鏡である。木棺の底部付近に、木質に上下を挟まれ鏡背部を上にした状態で出土した。木質の木目の方向は、木棺の長軸方向とは異なっており、棺材ではなく鏡を納めた箱であると考えられる。鏡背部には布（1cm角内に糸36本×36本と見られる）が鉱物化し無機質となって付着していた。これは、鏡を布でくるんだ後に箱に納めたものと考えられる。

鏡背部、鏡面部は全体的に暗緑色を呈しており、一部は緑青（塩基性炭酸銅）と推定される化合物が生成している。また、鏡面の一部には腐食が進んでいないと思われる、金属光沢の残っている部分が認められる。（後日、文様を確認するため、一部の布痕は取り除いた。）

### 2. 内部構造調査

材質調査の前に、埋蔵文化財調査事務所魚住分館においてX線透過装置（株式会社理学電機製RF150T）を用いて内部構造調査を実施した。その結果、内部に亀裂などは認められず材質調査の際に試料の研磨を行っても問題がないことを確認した。また、付着する布痕のために、鏡背部の文様が一部わからなかつたため、X線透過写真により、文様の確認を試みたが、無機質化した布の厚みが有るためかもししくは文様の凹凸が少ないなどの原因により明瞭に確認することはできなかつた。

撮影条件：130kV、2mA、3min

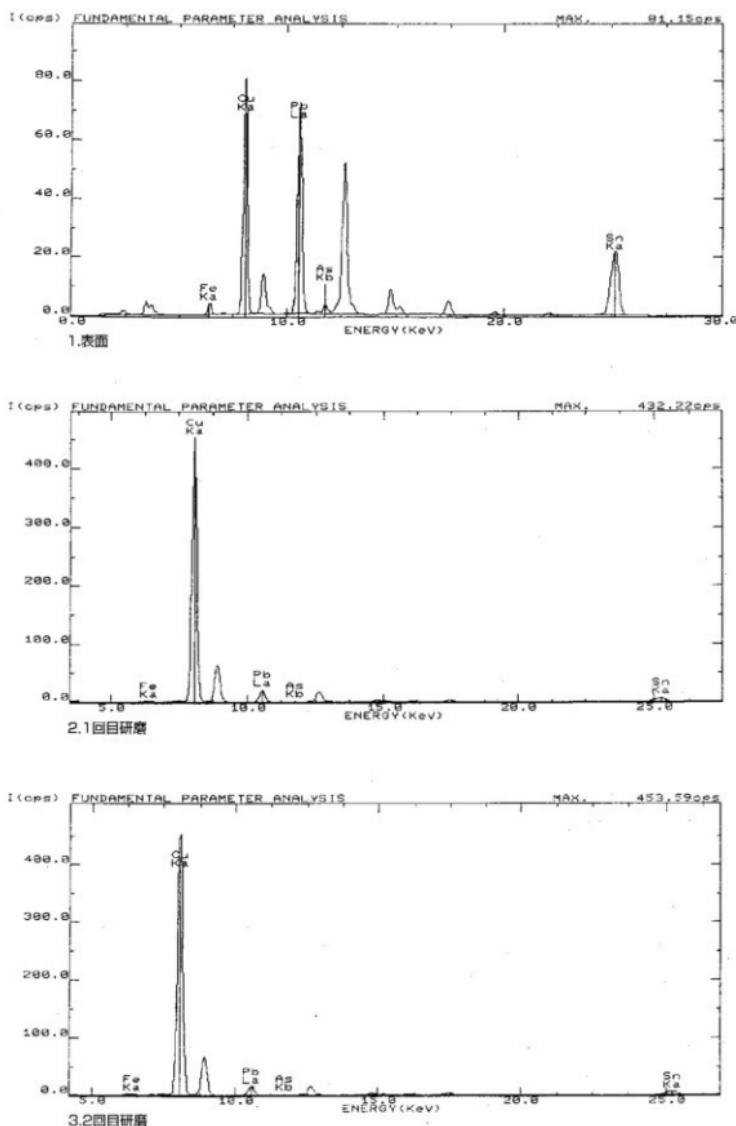
### 3. 材質調査

出土金属製品は、通常表面の腐食が著しく、非破壊法によって従来の化学組成を知る事は困難である。また文化財の調査は、試料の研磨など、たとえわずかでも破壊を伴う調査は許されないことが多い、材質調査は定性分析のみにとどめられる場合が多い。しかし、今回は試料の一部を研磨をして、研磨の各段階での定量分析を行い、比較する方法を試みた。

材質分析は、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室において、エネルギー分散型微小点蛍光X線分析装置（株式会社テクノス社製TREX650）を用いて実施した。ターゲットはモリブデン（Mo）、管電圧45kV、管電流0.3mA、測定時間500～229sec、コリメーターは1mmφを使用し、大気圧中で測定した。

鏡面部の腐食の進んでいない部分を選んで次の要領で測定を行った。

- ① 最初に全く研磨を行わない状態で表面の分析を行った。測定時間500sec（第4図1）
  - ② 次に、同じ部分を小型グラインダー（製品名：ミニター）で金銅色の地金が出るまで直径2～3mmの範囲を研磨し、分析を行った。測定時間229sec（第4図2）
  - ③ さらに同じ箇所を研磨して分析を行った。測定時間405sec（第4図3）
- ※2回目と3回目のデータを比較した結果、ほとんど差が認められなかつたため、研磨を終了した。



第4図 蛍光X線定性分析スペクトル

## 4. 材質分析の結果

### 定性分析

検出された元素より、鏡の材質は主に銅 (Cu) と錫 (Sn) を主成分とする青銅で、これに鉛 (Pb) を含有していることがわかった。試料からは、その他に鉄 (Fe)、ヒ素 (As) もわずかに検出された。鉄は埋蔵中に周囲の土中に含まれていたものが試料中に取り込まれた結果、検出されたと考えられる。ヒ素は、分析値を見る限りでは非常に微量であるため、銅や鉛鉱石の不純物として混入したものと考えられる。

### 定量分析

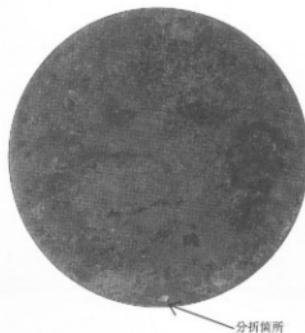
1回目の定量分析の結果で、銅に比べて錫、鉛の分析値が高いのは、試料が埋蔵中に表面が風化し酸化物となったときに銅よりも錫、鉛の酸化物の方が比較的残存しやすいためと考えられる。2回目、3回目の分析では、銅が78～79%、錫が7%、鉛が12～11%という結果が得られた。

## 5. まとめ

蛍光X線分析の特徴として、試料の形状や表面状態が良好な場合は、再現性の良い定量的なデータを得ることが可能である。今回は試料の研磨を行うことで、表面部分と地金部分の定量分析の結果が得られた。

分析の結果、風化が進んでいないように見える表面部分も実際には風化がかなり進んでいることが確認できた。地金部分については、錫が7%、鉛が12～11%と鉛の割合の方が多い結果が出た。一ヵ所だけの分析で全体について推定することは難しいが、もし、試料全体で鉛の割合が多いのだとすれば、今回調査した試料の材質は鉛青銅であるといえる。X線透過試験でX線が透過しにくかった原因も、材質中に鉛が多かったためであると言える。

今回の定量分析は、1ヵ所だけであった。試料全体の定量について明らかにするには、複数ヵ所に同様の分析を行う必要があるため、結論を出すことはひかえて今後の課題としたい。



第5図 和鏡の分析箇所

## 第V章 まとめ

### 第1節 第1面の畠状遺構について

畠状遺構を構成する灰褐色シルト質細砂内からは、土師器鍋(79)・青白磁(98)・青磁(102)が出土している。また、畠状遺構を被覆する洪沢砂層からは土師器擂鉢(77)、土師器鍋(78)、備前焼短頸壺(92)、白磁小皿(95)、青磁(101)などが出土している。

鍋が退化し弱い凸帯状の痕跡となった土師器鍋(78)・(79)は16世紀代の前半を中心とする時期が想定できる。また青磁(101)・(102)、白磁小皿(95)についても、同様の時期を想定できる。これに対して、土師器擂鉢(77)は三木城攻めに伴う、付城である君ヶ峰城などから出土例が知られており、16世紀代の後半を中心とする時期をあてることができる。備前焼短頸壺(92)についても姫路市本町跡において出土例が知られており、16世紀後半から17世紀初頭の時期が与えられている。

少量の遺物をもって取えて、時期を勘案するならば畠状遺構は、16世紀代の前半頃には営まれており、16世紀後半から17世紀初頭にかけて廃絶したと推測されよう。

### 第2節 第2面の遺構群について

第2面の遺構は、掘立柱建物・木棺墓・土坑・溝より構成されている。掘立柱建物は9棟復元でき、更に復元に使われなかった柱穴が多数残っていることから、10棟を超える建物が調査区内に存在したことは間違いない。

第2面に伴うと考えられる遺構の時期は遺構・包含層の遺物の時期から11世紀から13世紀前半に遡るものと捉えることができる。また、掘立柱建物の重複状態からは建物群が数時期に分かれることがわかる。

ここでは、掘立柱建物柱穴や建物に伴うと考えられる土坑の遺物の時期に加え、遺構の切り合い、掘立柱建物の方位を援用し、時期区分を行っておきたい。

掘立柱建物群は、軸方位から以下に分類することができる。

a群—軸方位を N57° E にとるもの SB206

b群—軸方位を N63° E 前後にとるもの SB202・SB203・(SB204)・SB207・SB209

c群—軸方位を N69° E 前後にとるもの SB201・SB205・SB208・SA201

大きくはこの3群に分けることができる。

SB201とSB202は重複しており、柱穴の検出レベルからSB201はSB202よりも新しいことがわかる。

SB203はSB204と柱穴が切り合いSB204はSB203よりも新しい。

SB206の柱穴はSB205に伴うと考えられるSX203に切られ、古い。

即ち、以上の点からa群→b群→c群の順に新しくなる可能性が指摘できる。

また、b群の建物のうち、SB203とSB204は切り合いSB204は新しい。SB204は軸方位をN65° Eにとっており、c群に近い軸方位となっている。また、SB204の北梁行きはSB205の梁行きと並びを合わせており、同時期に存在した可能性が高いと考えられる。加えてSB208の西梁行きについても、

SB205の梁行きと並びを意識している可能性が高いと考えられる。

また、SB208の西梁行きはSB209の梁行きと並びを合わせており、これら3棟が同時期に存在した可能性が高いことが考えられる。

また、建物に付属すると考えられる土坑は、SB204に伴いSK220、SB205に伴いSX203・SK221・SK222、SB208に伴いSX202となる。

以上の点を勘案すると、

A群 SB206

B群 SB202・SB203・SB207・SB209

C群 SB201・SB204・SB205・SB208・SA201・SK220・SX202・SX203・SK221・SK222、の3群に建物を中心とした遺構群を分けることができ、加えて、各群が重複して存在していたことが伺えるのである。

次に遺物から見た遺構の時期の検討を行う。

#### SB202に係わる遺物

(1)から(4)の遺物は柱穴の廃絶に伴って埋納した遺物である。土師器皿(1)・(2)は、三田市川除遺跡の川除編年の中世Ⅱ期—11世紀後半から中世Ⅲ期—12世紀前半の時期が与えられる。(3)については更に古く位置付けられ、混入の可能性もある。(4)については、川除編年の中世Ⅱ期に類例があり、同じく11世紀後半の時期が与えられる。以上から、11世紀後半から12世紀前半にかけて廃絶したと考えられる。

#### SB203に係わる遺物

(5)から(10)の遺物は柱穴の廃絶に伴って埋納した遺物である。皿(5)、椀(7)から(9)については廃絶に伴って廃棄した遺物である。三田市川除遺跡の川除編年の中世Ⅲ期—12世紀前半の時期が与えられる。

(10)は川除編年の中世Ⅲ期（鉢B1）、三木市宮の池窯に類例を求める。

以上のことから12世紀前半の時期に廃絶したと考えられよう。

#### SB205に係わる遺物

(11)から(15)の遺物は柱穴の廃絶に伴って埋納した遺物である。須恵器小皿の形態から12世紀後半の時期と考えられる。

またSB205に伴うSK221の出土土器(58)・(59)についても底部の突出しない平底の底部を持つ点から三田市川除遺跡の川除編年の中世Ⅳ期に入り、12世紀後半の時期を考えてよいであろう。

#### SK236に係わる遺物

明瞭に突出する底部をもつ(42)は11世紀代の時期が推定できる。また、長嗣形の胴部をもつ(37)・(38)についても時期を明瞭にできる資料は提示できないが、口縁の直下に鈎が付く形態の羽釜が出現するのは10世紀代以降と推定できること、10世紀前半の資料である三田市古城1号窯出土資料よりも口縁部形態や調整から数型式後出する可能性が高いことから推して、SK236は11世紀代に廃棄された土坑と捉えることができる。

#### 木棺墓 SX205に係わる遺物

(45)・(50)・(51)・(52)は底部が平底を呈しており、SK221の出土土器(59)と類似するものである。また、扁平な器形を持つ皿(45)、青磁碗(46)の存在からみて12世紀後半から13世紀前半にかけて、(若干、

器高が浅い点から恐らく13世紀に入る可能性は高い)と見てよいであろう。副葬している和鏡の時期が12世紀中頃との所見を頂いており、矛盾は無い。木棺は13世紀初めを前後する時期に葬られ、墓上に遺物が供えられたと考えておく。

#### SB208に係わる遺物

SB208に伴うと考えられるSX202の遺物を検討する。

SX202の遺物はSK236の遺物に近い形態の椀が出土しており、近い時期が想定できる。

(65)は(42)に近い形態を持つ。(42)は突出した底部に伴い、内面についても明瞭に凹部を持つ個体である。これに対し、(63)・(64)・(67)は底部内面の凹みがやや甘く、若干後出する印象を受ける。

また、鉢(68)については柳谷5号窯・宮の池窯に類例を求める。

以上の観点からSX202の遺物の時期は12世紀前半と考えておく。

個別の遺構の時期を遺物より導きだす作業を行った。土坑の遺物・柱穴内の遺物は基本的には各遺構の廃絶時期を示すものであろう。結果、大きくは11世紀後半から13世紀前半にかけて、第2面の遺構は形成・廃絶したと捉えることができ、11世紀後半・12世紀前半・12世紀後半・13世紀前半に遺構が分かれることができたことが判明した。これは、前述した方位・切り合いから導きだされる変遷とともに齟齬をきたしてはいない。

以上の観点から第2面の遺構の変遷を以下のようにまとめておくことができよう。

第1段階・11世紀代に入る頃中央部にSB206が出現する。

- ・土坑SK236についてもこの段階において使用されていると考えられる。

第2段階・11世紀後半にはSB206に替わり、南よりにSB202、中央にSB203、北よりにSB207、北端にSB209が出現する。

- ・規模から見てSB207が中心建物となる。

第3段階・12世紀前半に入り、SB202は廃絶しSB201に建て替わる。

- ・SB203は廃絶しSB204に建て替わる。
- ・SB207は廃絶しSB208に建て替わる。
- ・SB208の西梁行はSB209の西梁行と並んでおり、並存していたと考えられる。
- ・SB205はSB204と軒を並べて出現し、規模から見てSB207に替わり中心建物となる。

第4段階・12世紀後半にSB205が廃絶する。

- ・13世紀代に積極的に入る遺物が乏しいことから他の建物についてもこの段階で廃絶したと考えられる。
- ・木棺墓SX205が集落のほぼ最終段階で営まれる。

第5段階 混水砂が被覆する。

以上の変遷が考えられるのである。

### 第3節　おわりに

調査の結果、11世紀から13世紀前半まで、もしくは12世紀全般に涉って建物群が営まれ集落が継続していたことが判明した。

集落の性格・階層については、どのように捉えればよいであろうか。

宿原寺ノ下遺跡では、第2段階に入って、床面積80m<sup>2</sup>を超える中心的な建物が、付属屋を伴い出現てくる。そして、第3段階に入っても床面積80m<sup>2</sup>を超える中心的な建物は建て替えられ存続することが判明している。

これまでの、集落史の研究成果では床面積が40m<sup>2</sup>を超える建物を営む集落は、有力百姓層以上の階層の住居と推定されている。

宿原寺ノ下遺跡の80m<sup>2</sup>を超える建物は有力百姓層もしくは、更に上位の郷規模の在地地主層や在地領主層の住居と認識できる規模である。

有力百姓層と上位の在地地主層を区別する指標としては、集落を囲む溝・堀の存在が指摘されている。

宿原寺ノ下遺跡では、第Ⅲ章において集落を1辺80m前後に区切る溝の存在を指摘した。

しかし、検出された溝は現状では幅50cmに溝たず、蛇行を見せる部分もある。建物群の区画に特化した溝ではなく、条里型地割りに乗った区画溝ととらえたほうが妥当であろう。この点を考慮すれば、宿原寺ノ下遺跡を構成する階層は現段階では有力百姓層にあてることが穏当と考えられる。

出土遺物の観点からも、輸入陶磁器が白磁玉縁口縁碗・壺片など少量が出土するに留まっている。この点も、集落を構成する階層が際立って上位でないことを示すものと捉えられよう。

即ち、今回の調査では、有力百姓層の屋敷地の中心部が調査できたと認識できるのである。

宿原寺ノ下遺跡に置いて注目されるもう1つの成果として、木棺墓があげられる。

中世において集落内から主に単独で発見される木棺墓は、近年、集落（屋敷）の創設者（祖先）の墓である「屋敷墓」の可能性が指摘されている。

建物に近接し、単独で検出された、SX205は上部構造として、石組みを持ち、祭祀が行われたことが出土遺物の存在から推測される資料となった。

しかし、出土遺物の検討からは、SX205は集落の廃絶期に埋葬され、祭祀が行われたことが明らかになった。

調査範囲に制約があることから、同時期の建物群が周囲に存在する可能性も排除できないが、屋敷の廃絶時期に登場してくる単独墓の存在の可能性は、「屋敷墓」を理解する上においても興味深い例を提供したと言えよう。

本報告では、遺物からみた集落の時期決定、集落・木棺墓の性格に関する検討を含め、深化されていない部分が極めて多い、更なる検討を行い、後日、別稿にて、その責を果たすこととした。

# 図 版

4



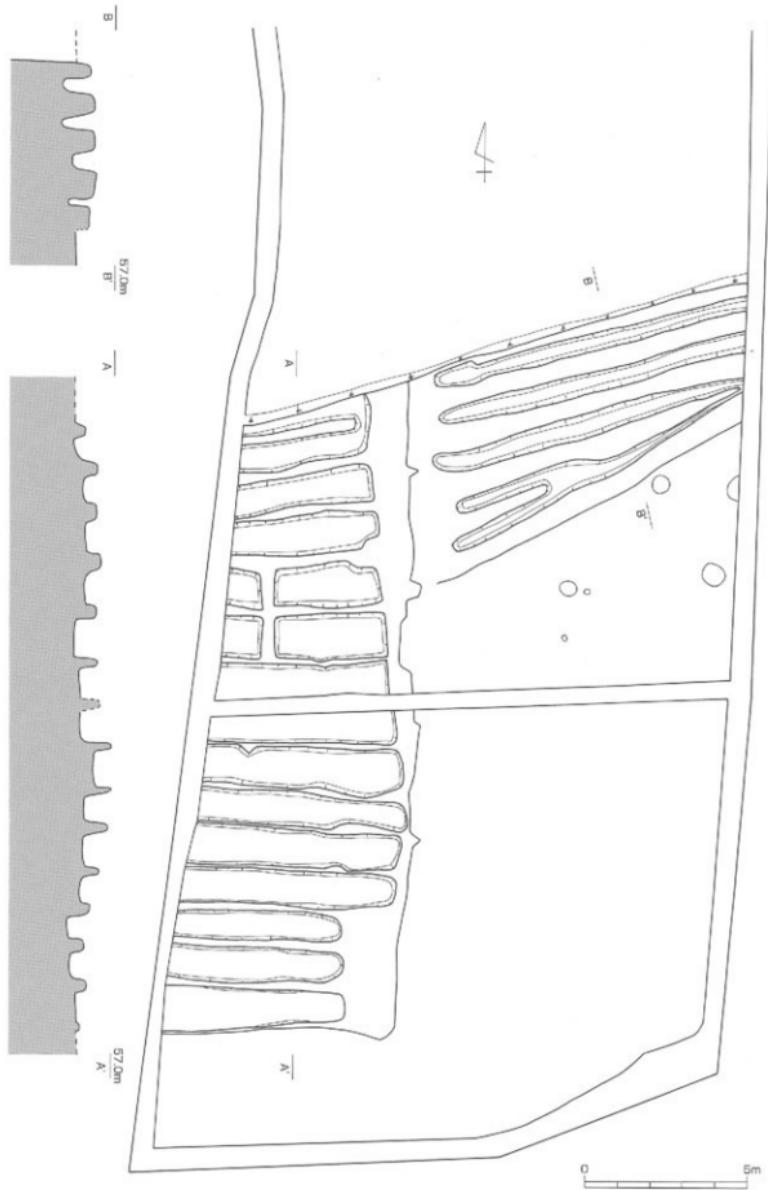
第1・2面



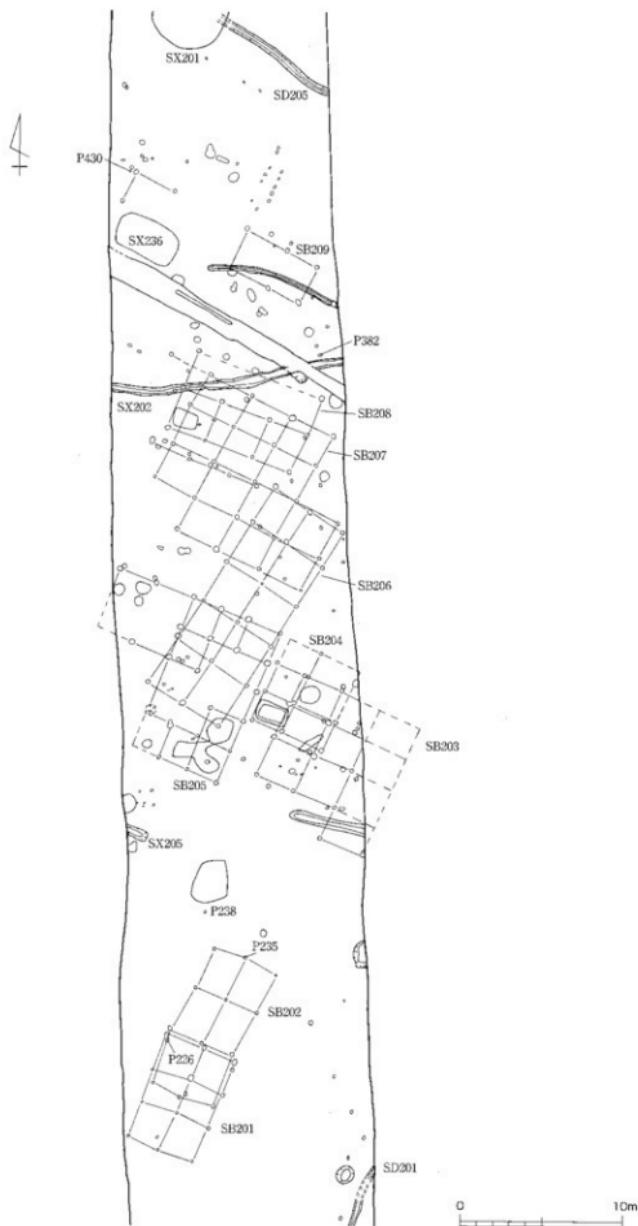
第2・3面



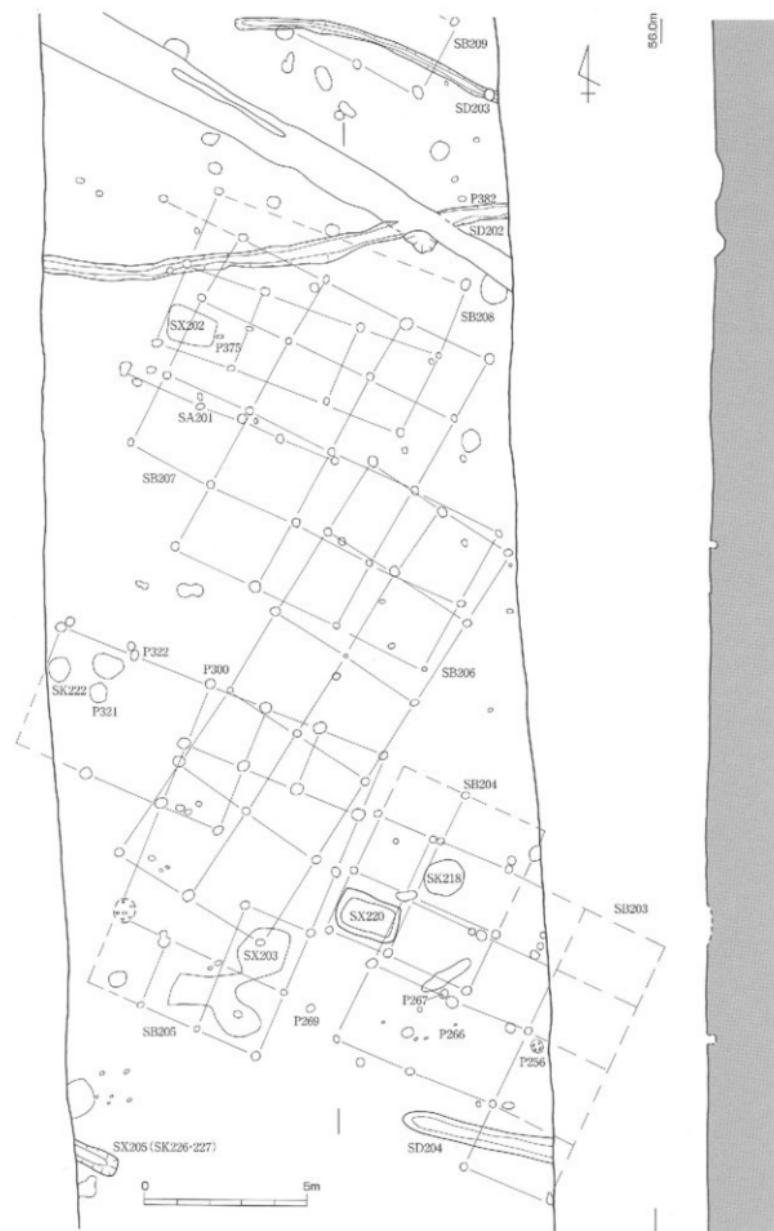
遺構全体図



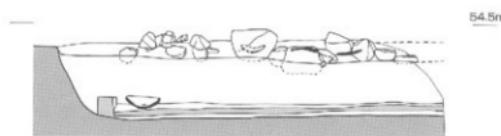
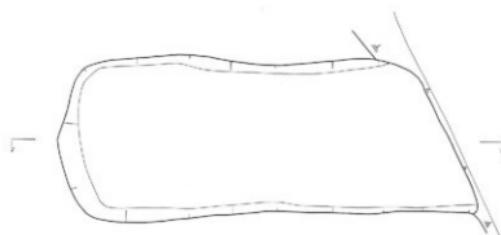
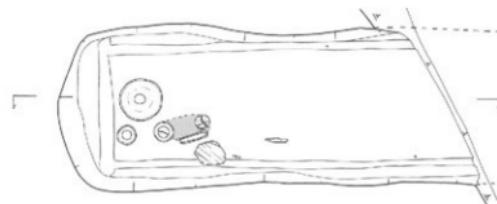
第1面 畠状遺構



第2面 遺構詳細図 I

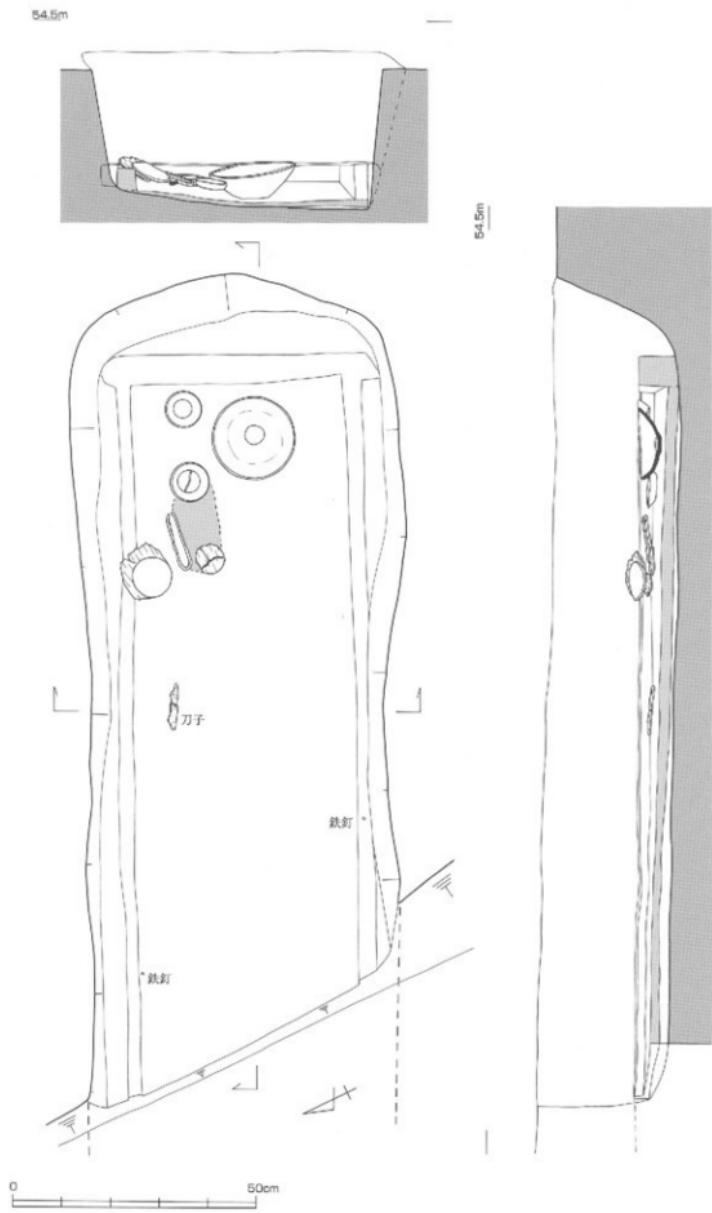


第 2 面 遺構詳細図 II

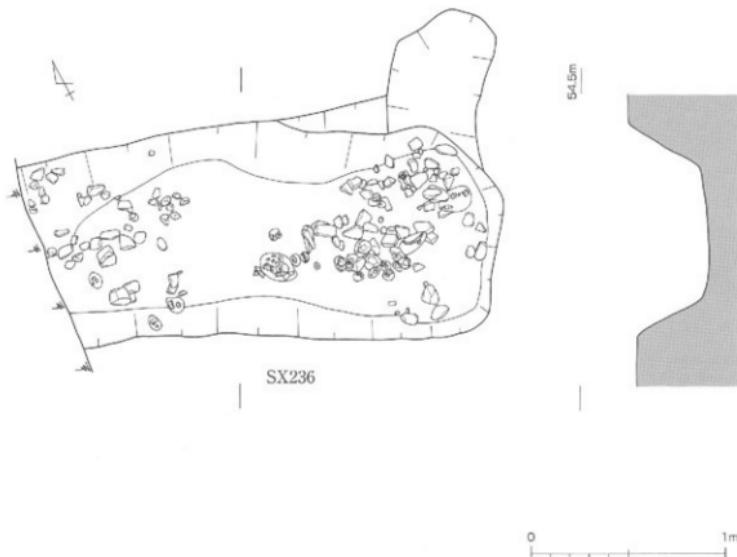
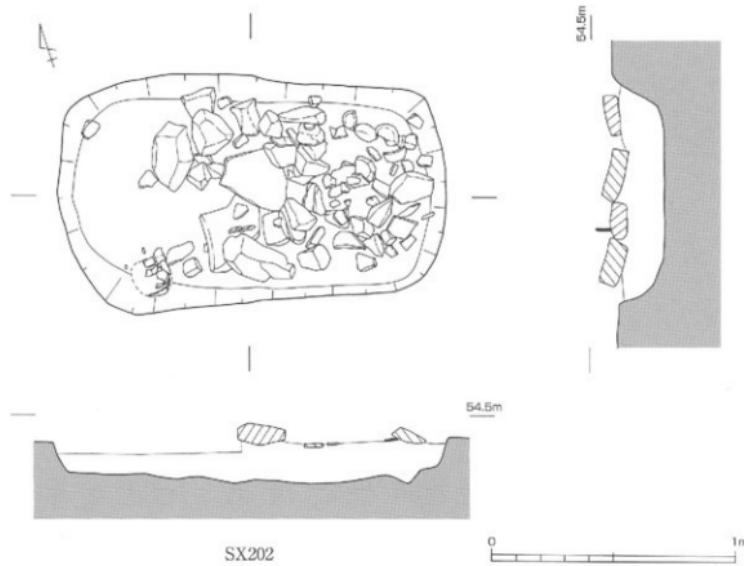


0 1m

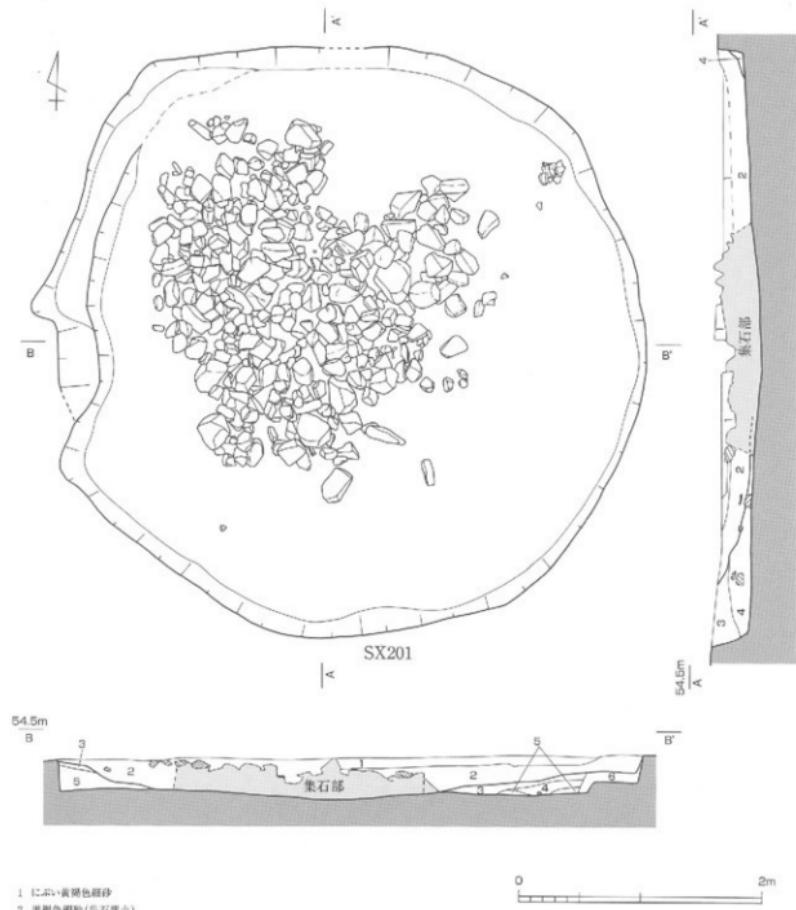
木棺墓 SX205 I



木棺墓 SX205 II

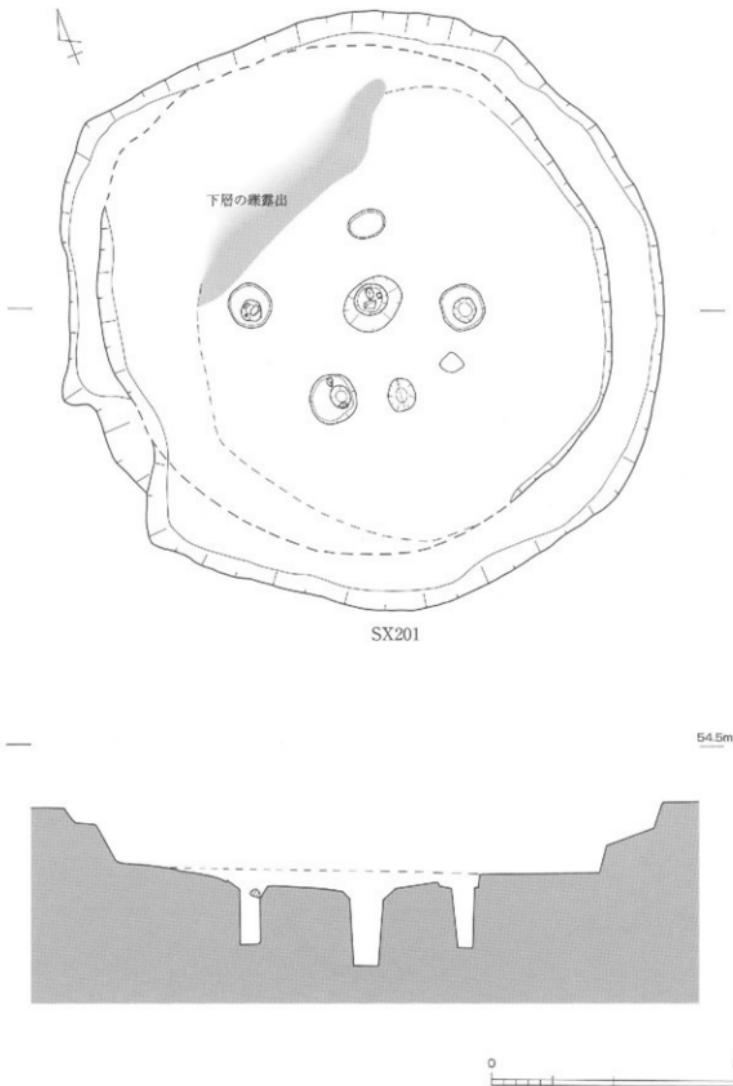


土坑



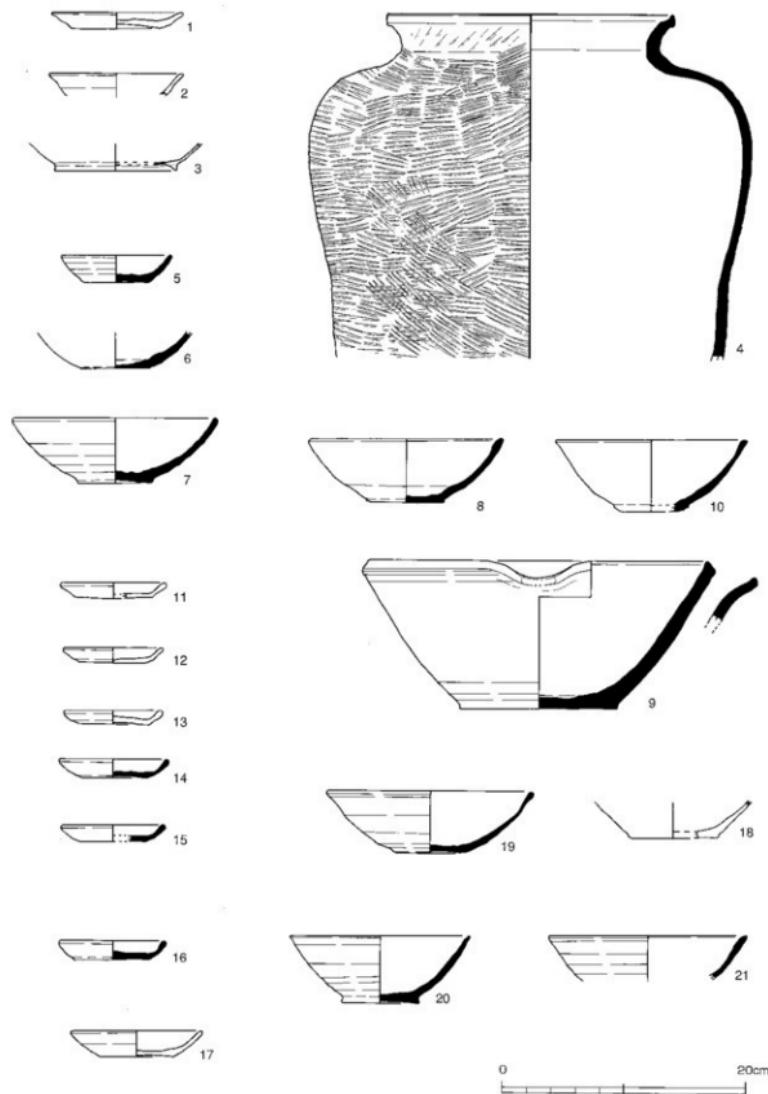
- 1 にじい黄褐色細砂  
 2 黒褐色細砂(集石堆土)  
 3 にじい黄褐色細砂  
 4 にじい黄褐色細砂  
 5 暗褐色細砂  
 6 黄褐色シルト質細砂

豎穴住居址状遺構（上層）

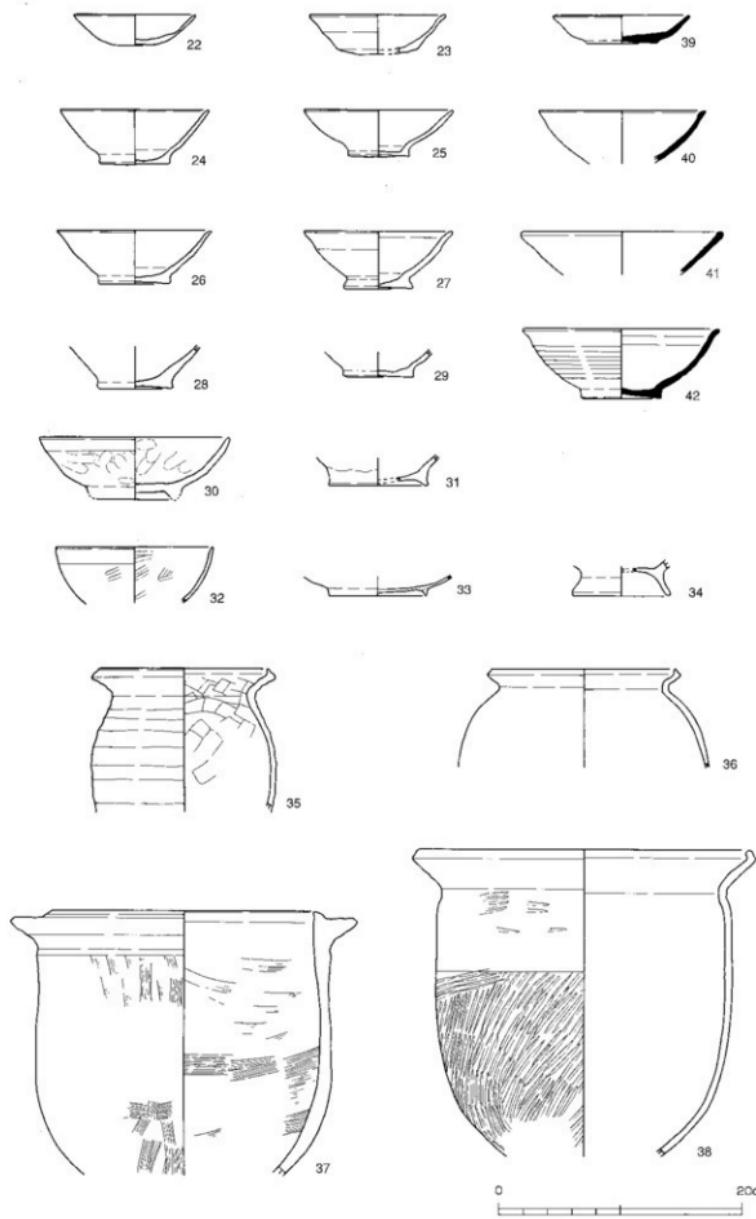


竪穴住居状遺構（下層）

図版 10

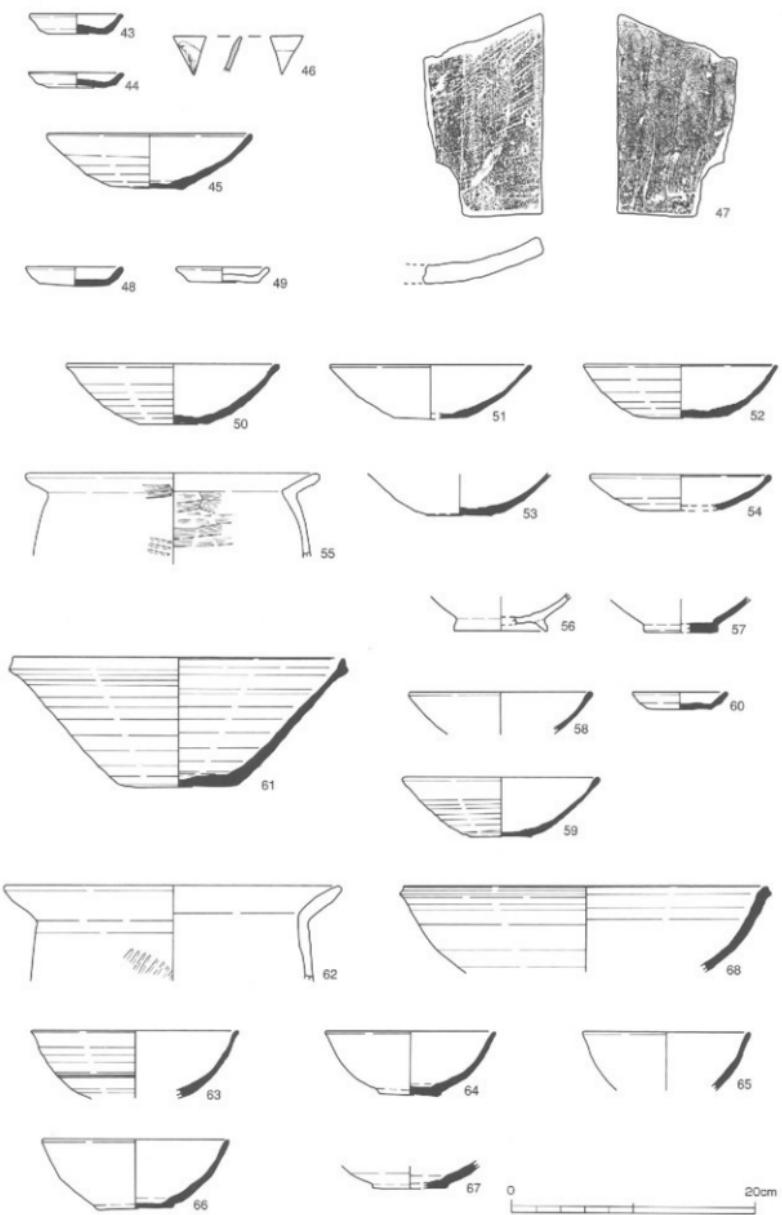


柱穴出土の遺物

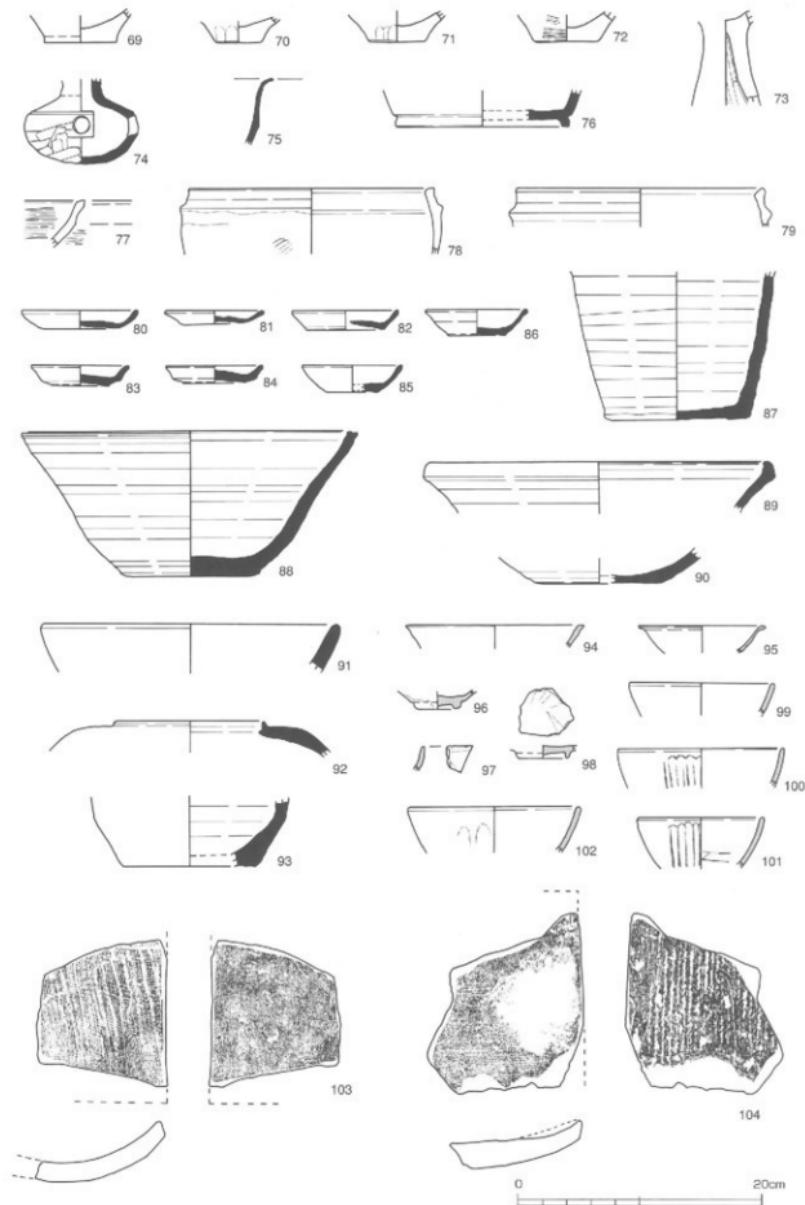


土坑出土の遺物 I

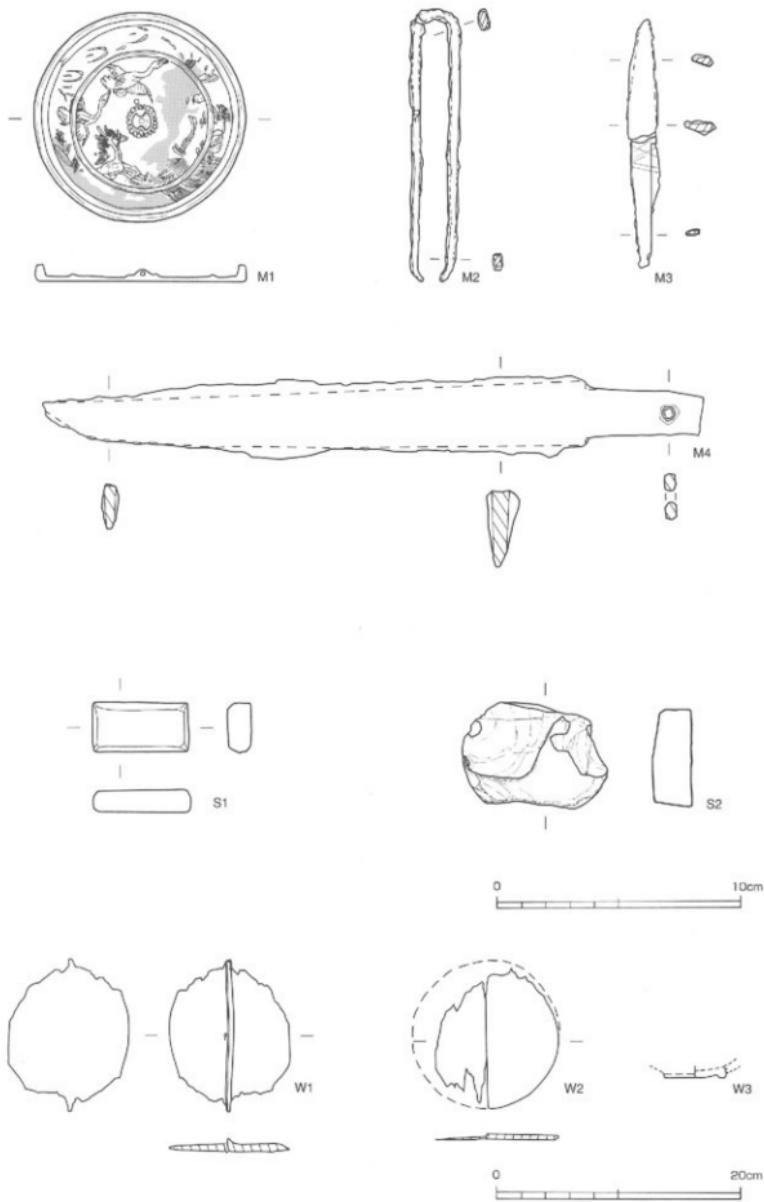
図版 12



土坑出土の遺物 II



竪穴住居址状遺構・包含層出土遺物



金属製品・石製品・木製品

# 写 真 図 版



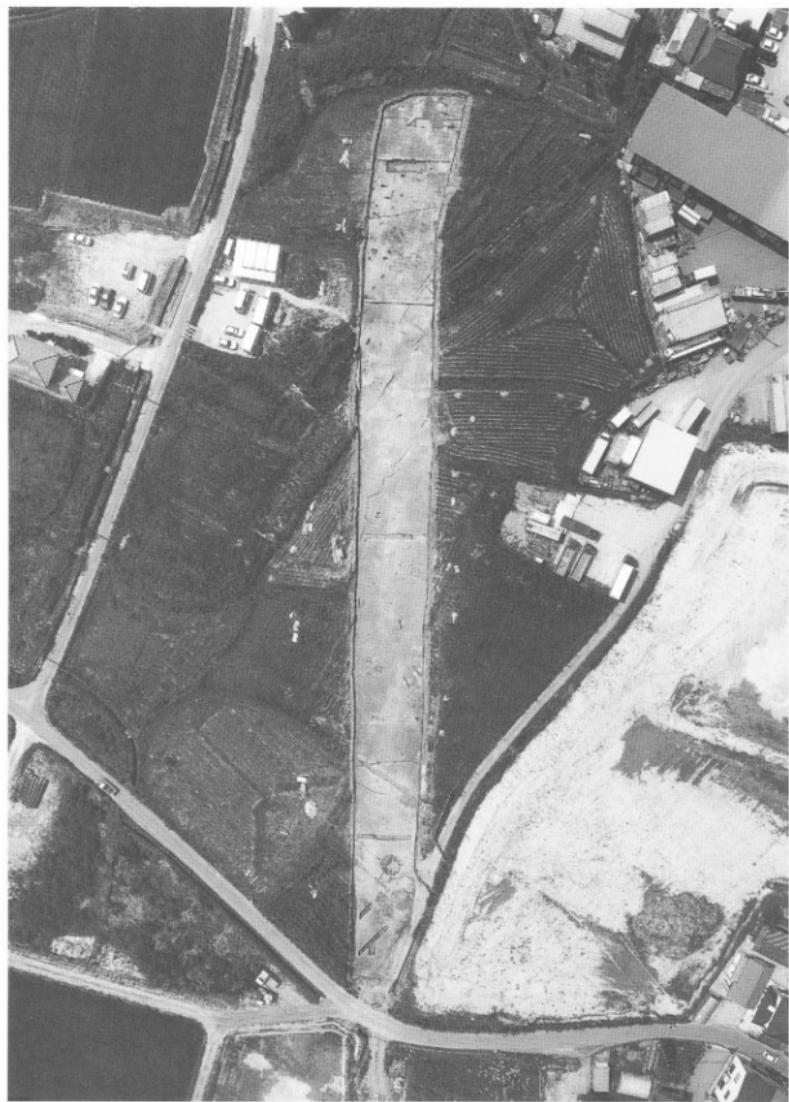
空中写真 I (宿原地区周辺)



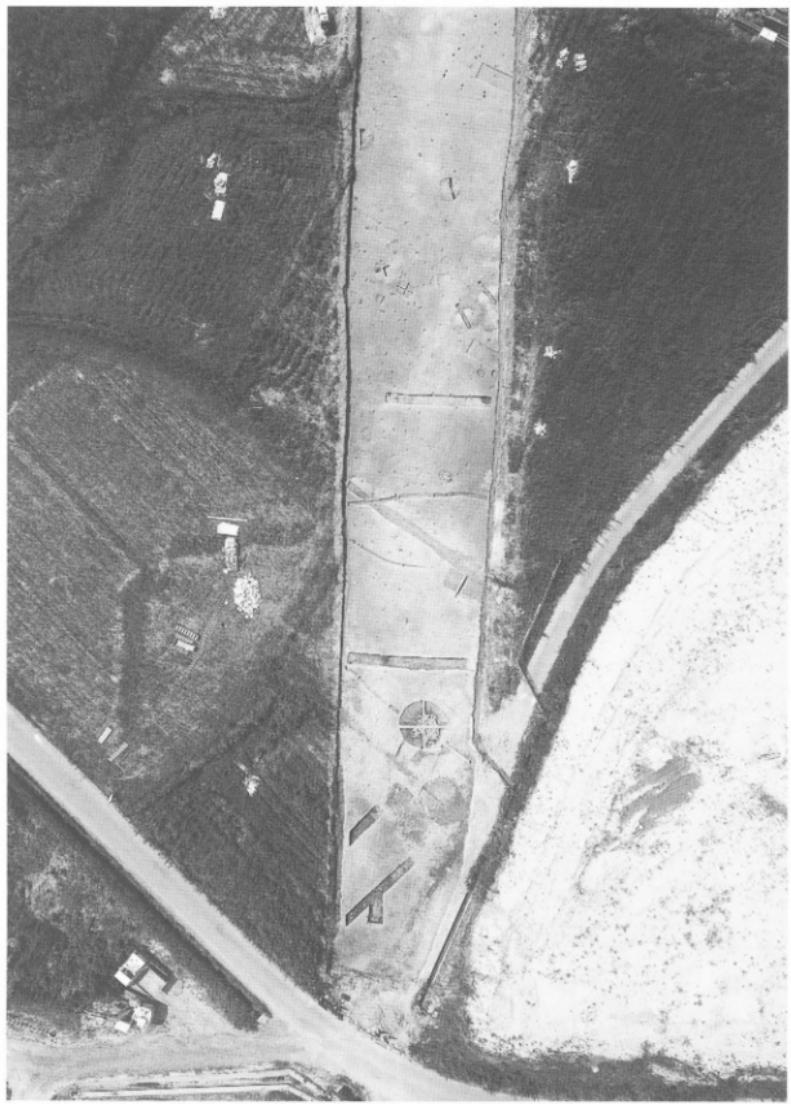
調査地点遠景（南西から）



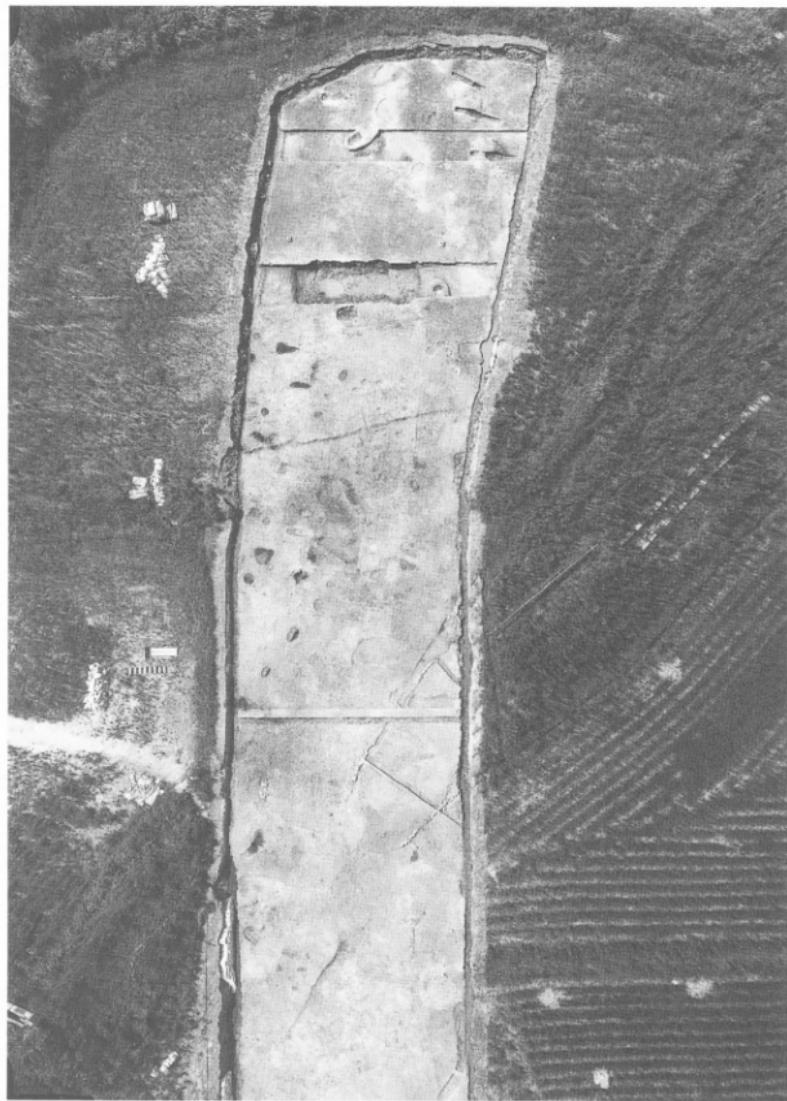
同上（南東から）



遺構全景



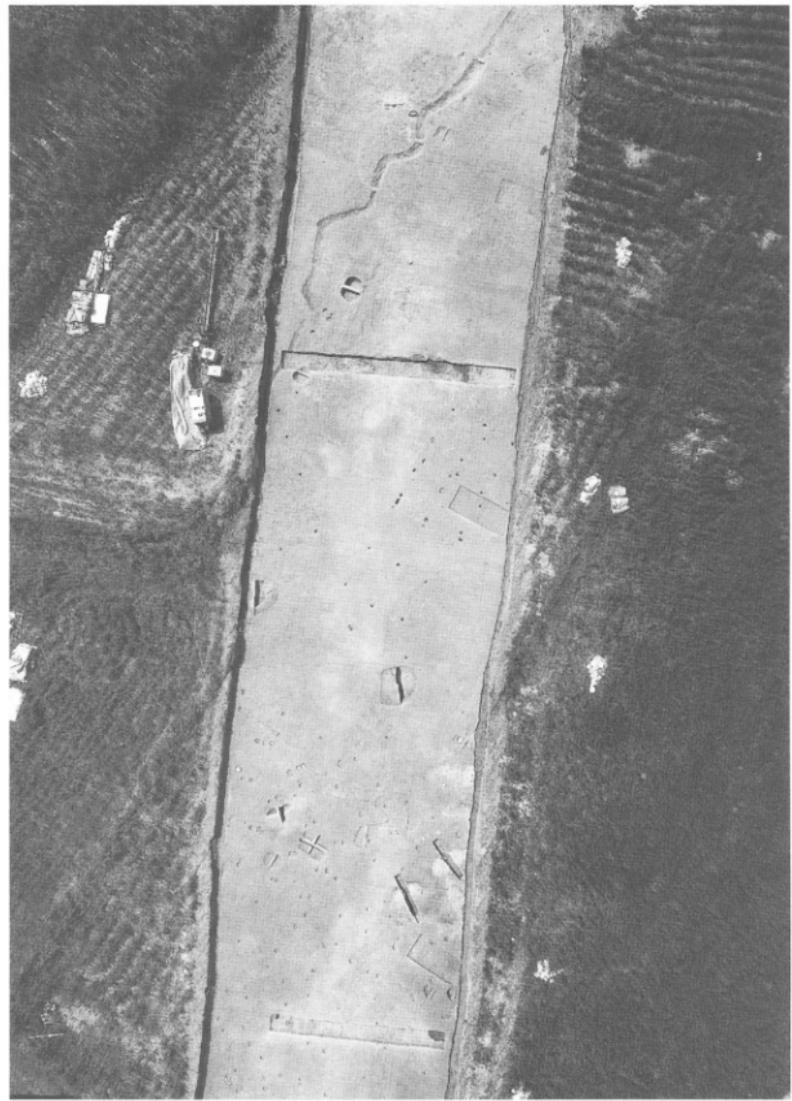
調査区中央から北半の状況（北から）



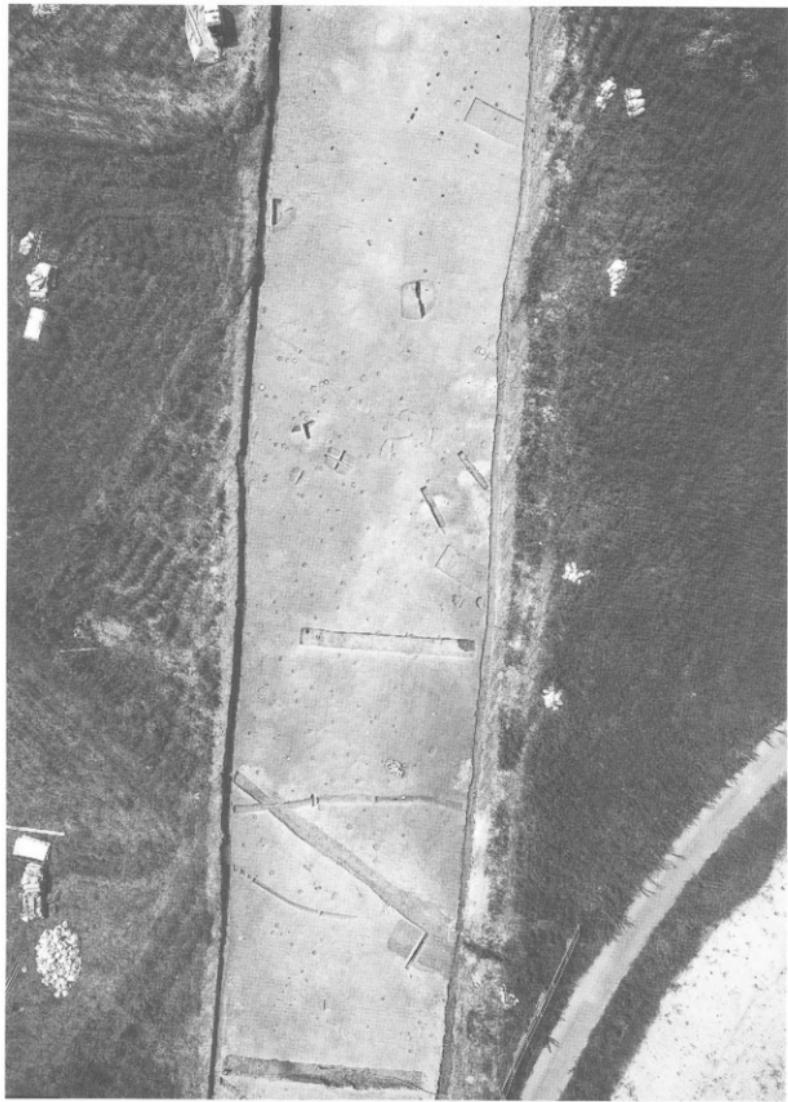
調査区南半第 2 面の状況（北から）



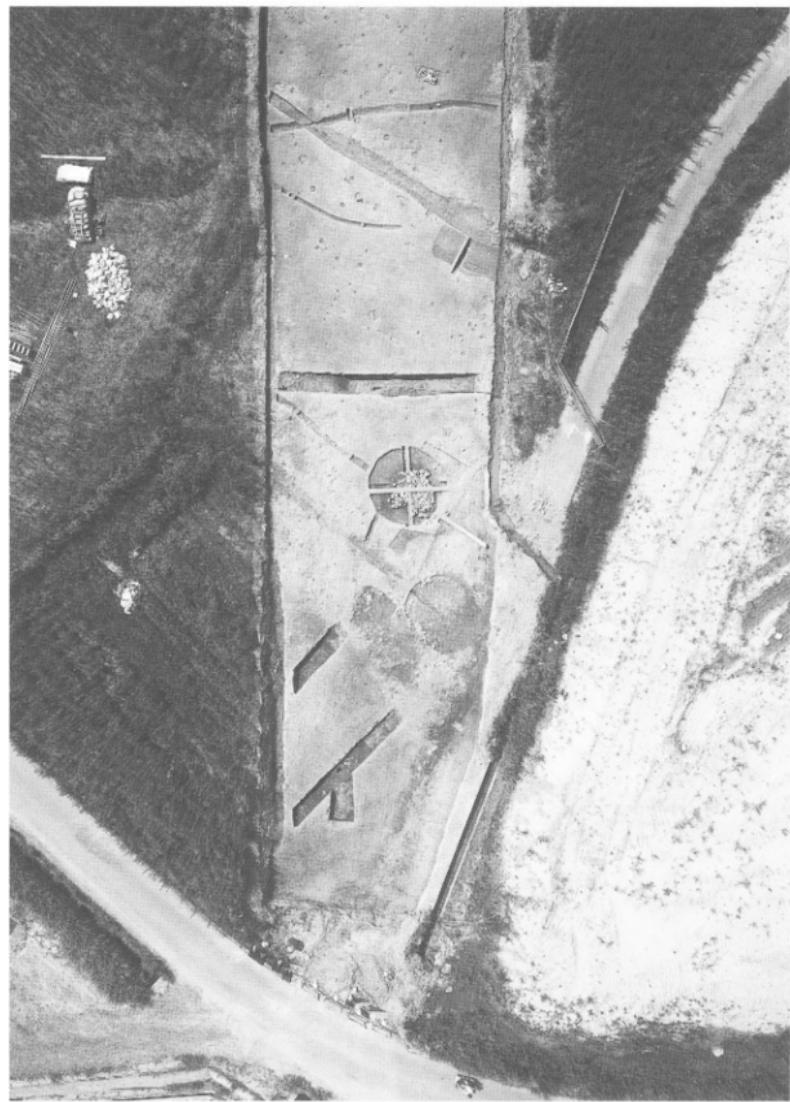
調査区南半から中央の状況（北から）



調査区中央の状況（北から）



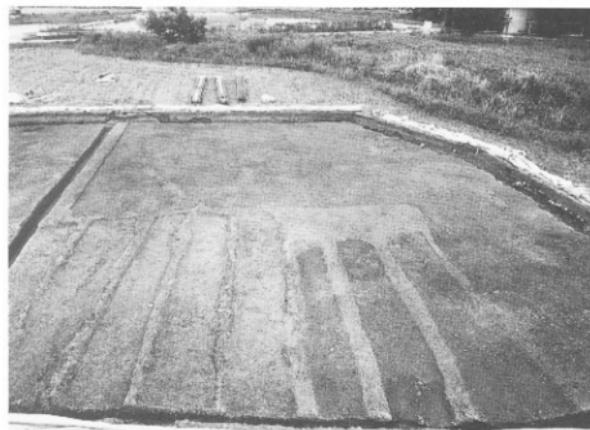
調査区中央から北半の状況（北から）



調査区北半の状況（北から）



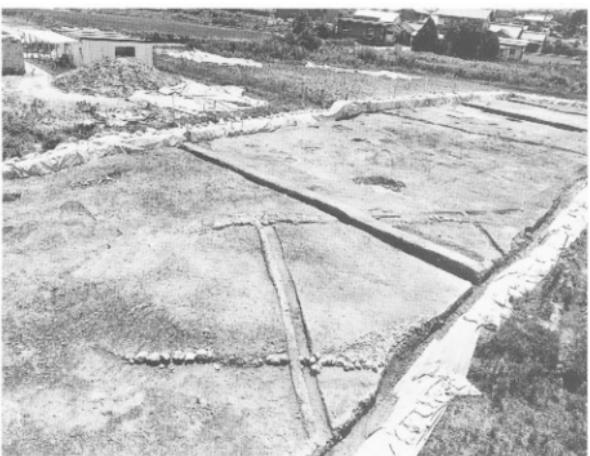
島状遺構（南から）



島状遺構（西から）



島状遺構（東から）



近世の石列（北西から）



第2面南端の状況



第2面建物群の状況  
(南西から)



中央部の状況（南西から）

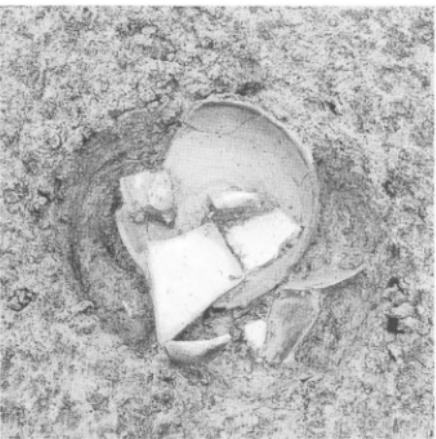
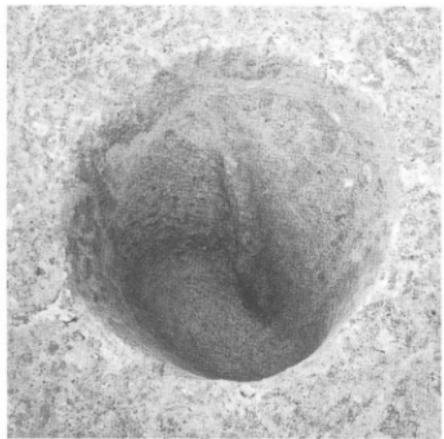


S B 201 (西から)



S B 202 (部分)



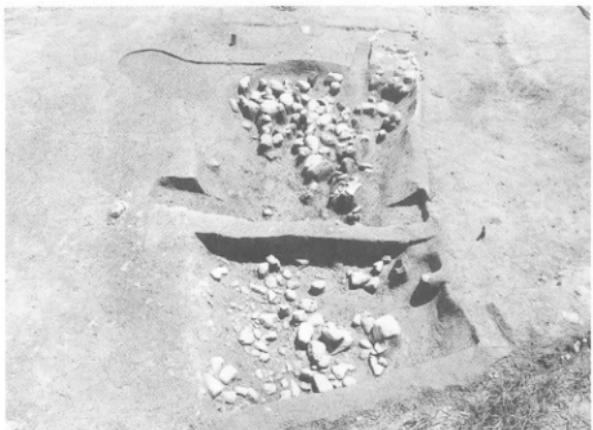


左上 P320

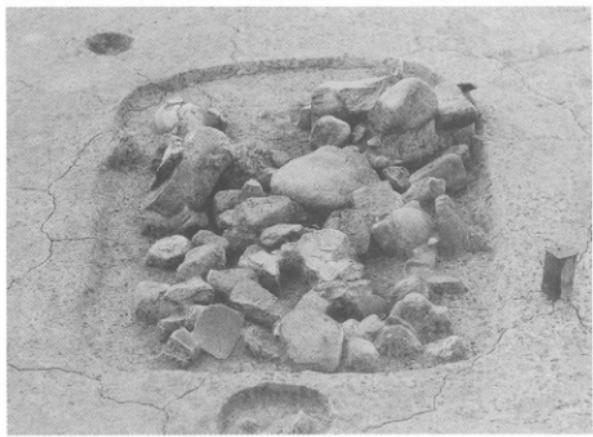
右上 P269

左下 P236

右下 P226



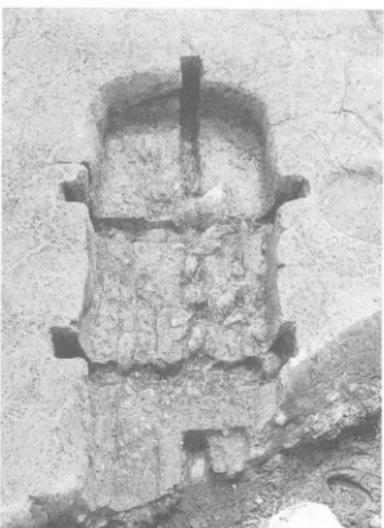
SK 236 (西から)



SX 202 (東から)



同上 (北から)



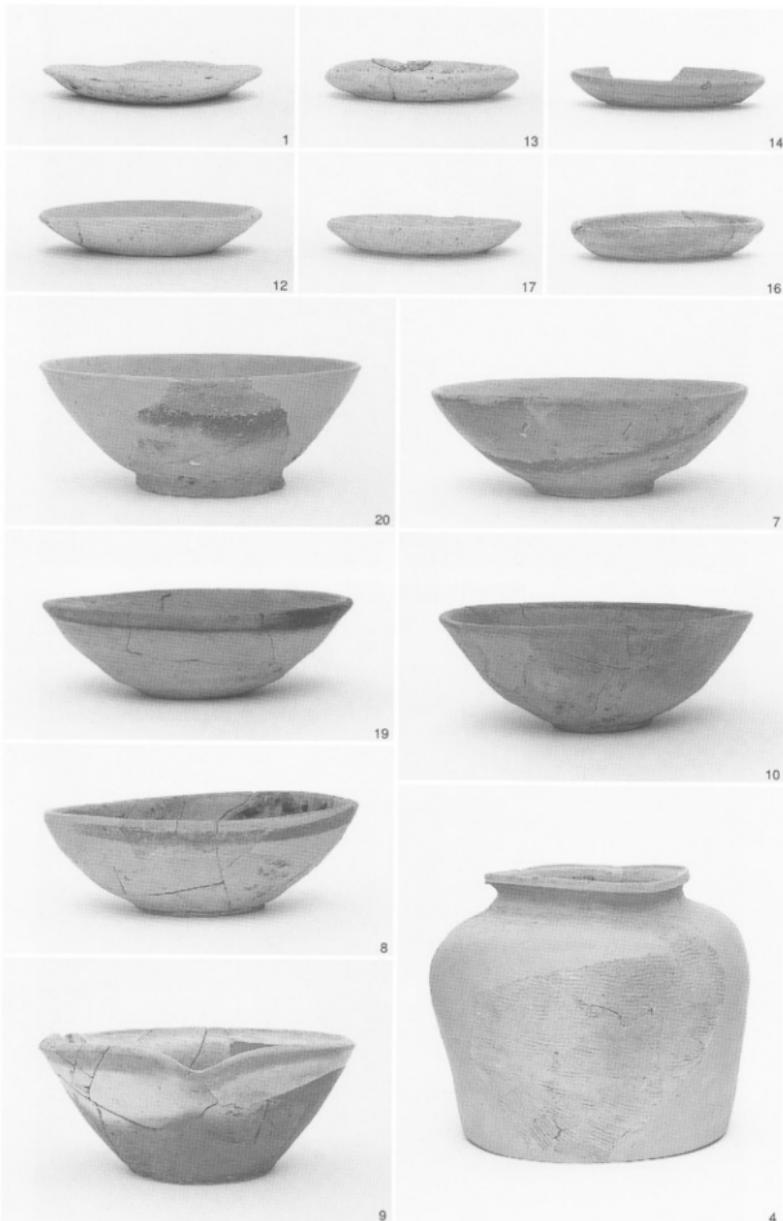
左上 木棺墓の石組  
右上 同上 墓壙  
中 同上 石組  
下 同上 副葬品  
検出状況



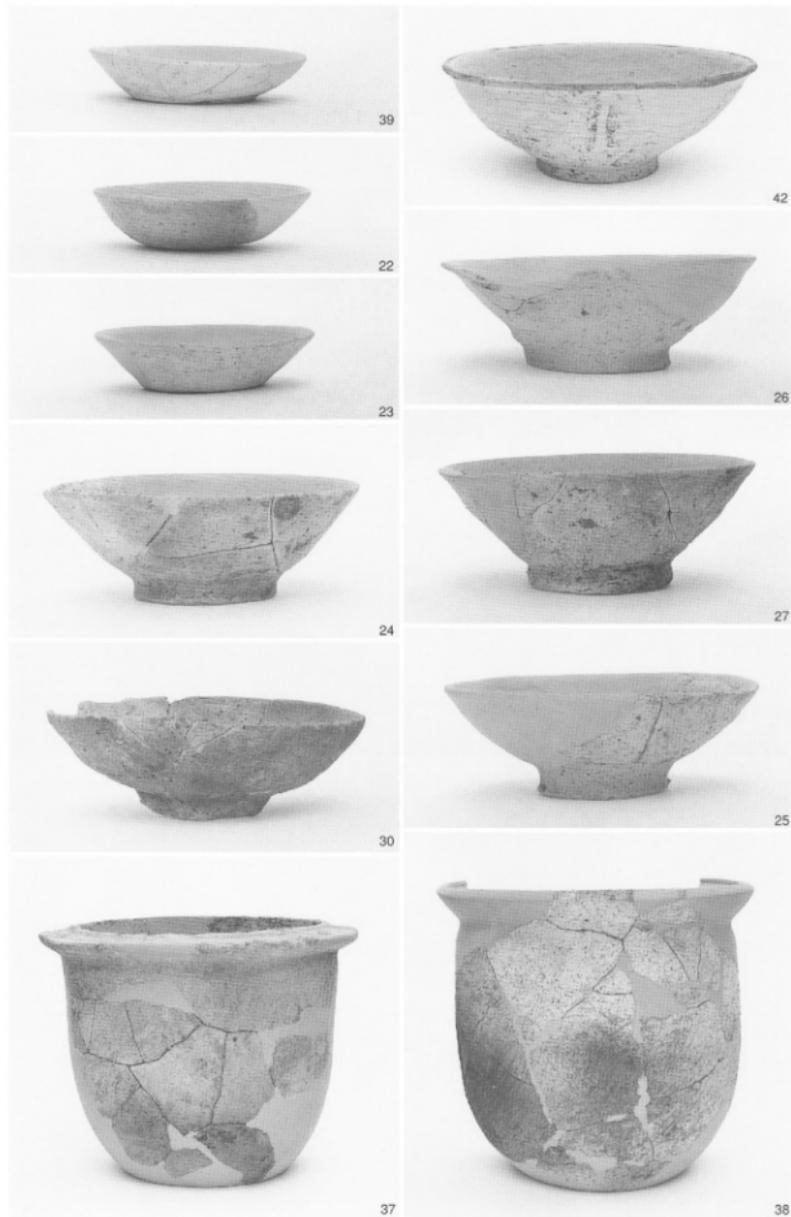
竪穴住居状遺構（上層）



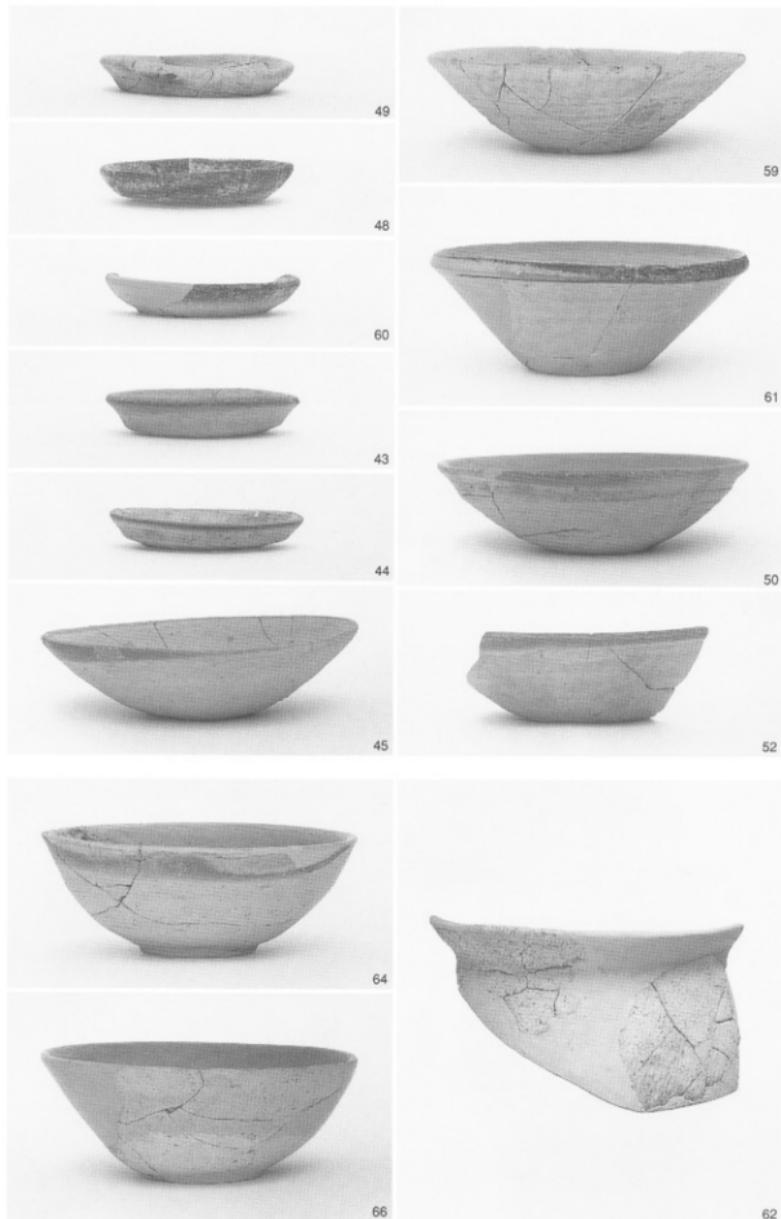
同上（下層）



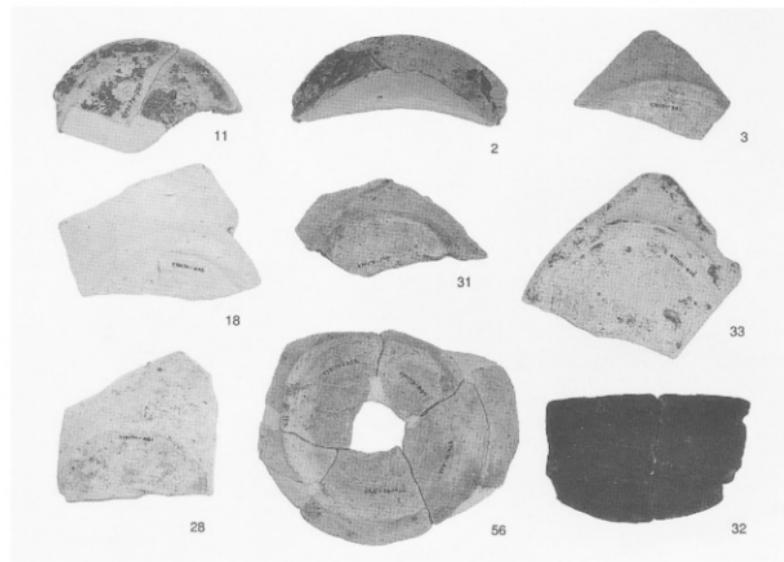
柱穴出土遺物



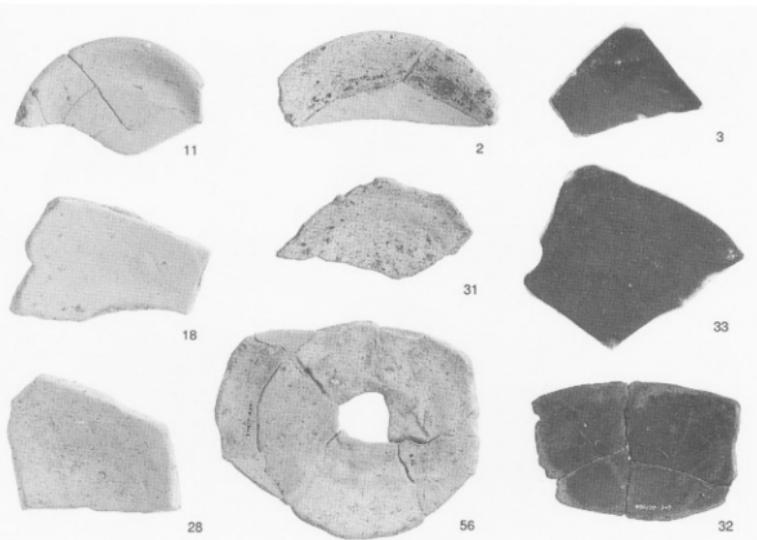
土坑 S K 236 出土遺物



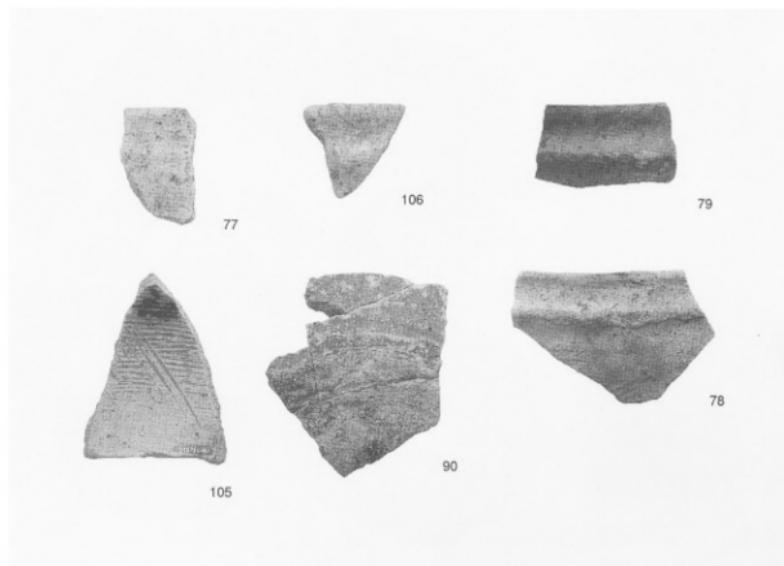
土坑・木棺墓出土遺物



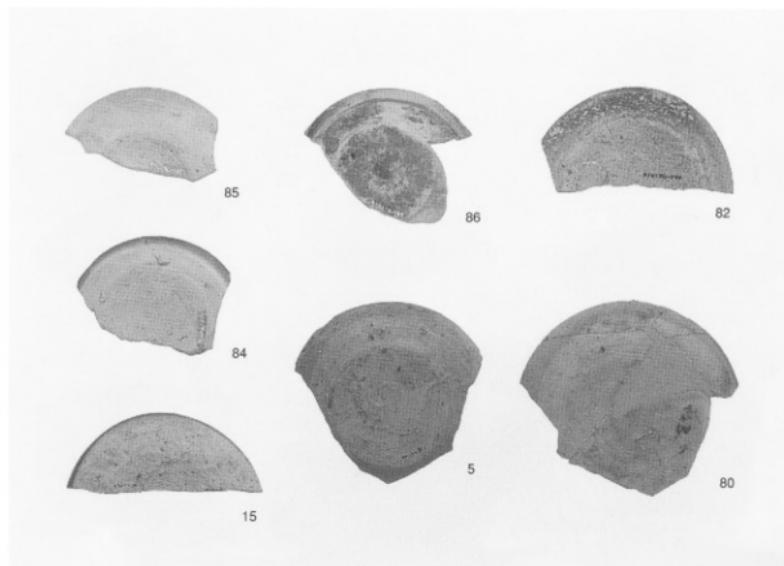
土篩器・黒色土器（表）



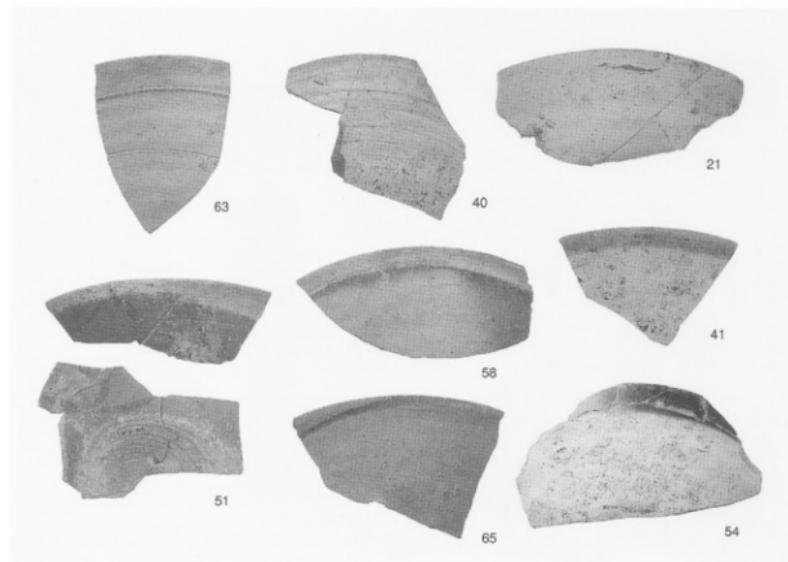
同上（裏）



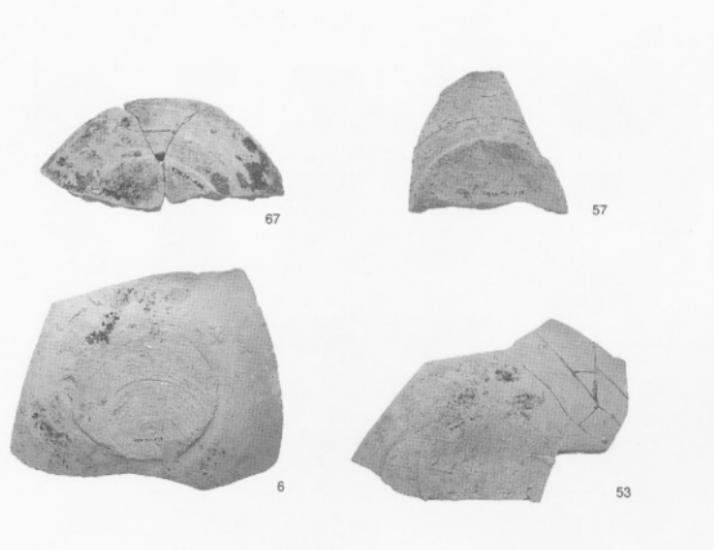
土師器擂鉢・鍋



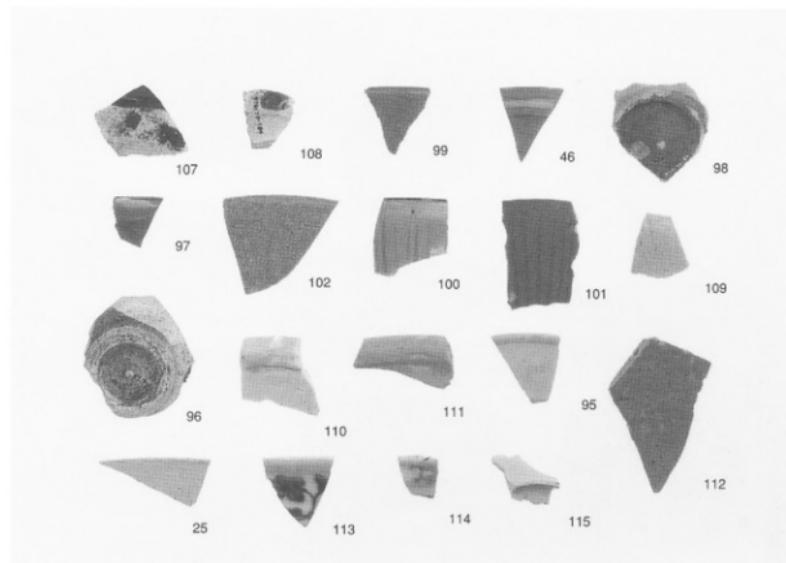
須恵器小皿



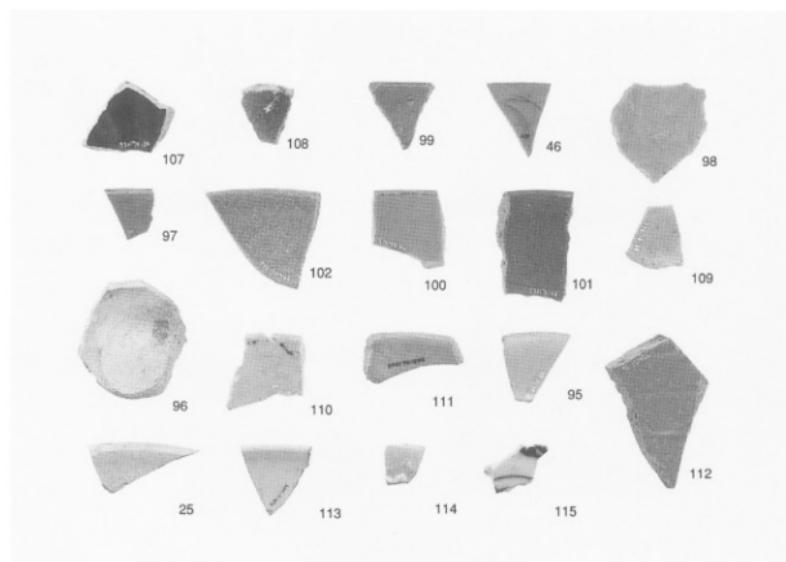
須恵器椀 I



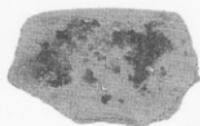
須恵器椀 II



国産施釉陶器・輸入磁器（表）



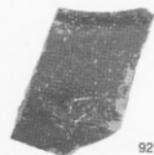
同上（裏）



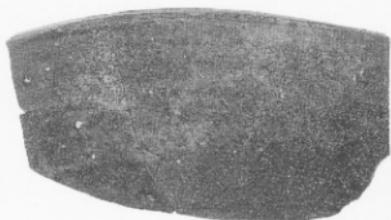
89



91



92



68



93

国産無釉陶器



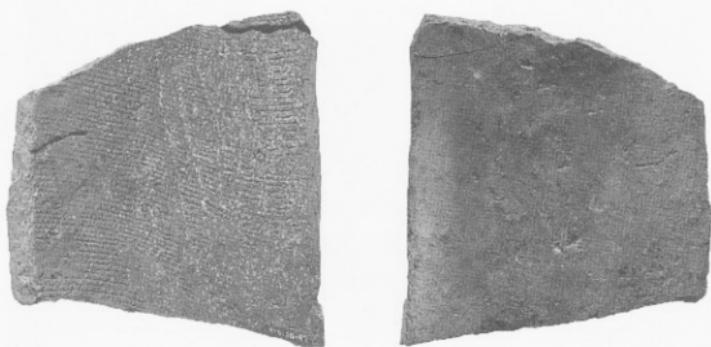
47



平瓦 I



104



平瓦 II

103



70



71



73

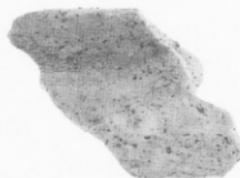


69



72

弥生土器



55



75



76



36



35

その他の土器



83



81



88



74



87

包含層出土土器



S1



S2

石製品



M1



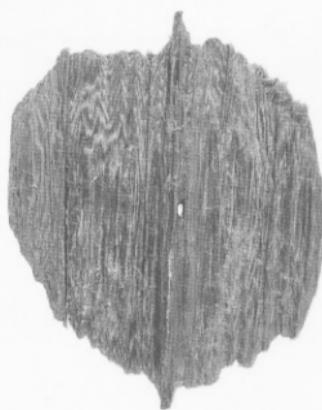
M2



M3



M4



W1



W2

金属製品・木製品

# 報告書抄録

ふりがな	しゅくはらでらのしたいせき						
書名	宿原寺ノ下遺跡						
副書名	(一) 三木環状線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第264番						
編著者名	西口圭介・岡本一秀						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号				TEL 078-531-7011		
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号				TEL 078-341-7711		
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月19日						
所収 遺跡名	所在地	コード 市町村調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宿原 寺ノ下 遺跡	兵庫県三木市 宿原寺ノ下	28215 970170	34度 47分 58秒	135度 0分 12秒	970507 970811	2,971m <sup>2</sup>	三木環状線 緊急道路整 備事業に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宿原寺ノ下 遺跡	集落跡 建物跡 墓址	弥生時代後期 平安から鎌倉時代	堅穴住居跡 柱穴・土坑 木棺墓	弥生土器 七輪器・須恵器・ 輸入磁器・和鏡・ 毛抜き・刀・刀子	荒磯文双禽鏡		

---

---

兵庫県文化財調査報告 第264冊

## 宿原寺ノ下遺跡発掘調査報告書

—(一)三木環状線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2004年3月19日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

---